

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム

2011 東京国際大会

一次報告書

平成 23 年 12 月

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム日本

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2011 東京国際大会
一次報告書

目次

1. ご挨拶 p.3
2. 設立趣意 p.5
3. 開催概要 p.6
4. 運営体制 p.8
5. 開催スケジュール p.9
6. 参加国・大学一覧 p.13
7. 講座・講師一覧 p.14
8. 日付別開催報告 p.16
9. 運営を終えて(運営スタッフ所感) p.33
10. 決算報告書 p.63
11. ご連絡先 p.64

1. ご挨拶

このたびは、グローバル・ネクストリーダーズフォーラム2011東京国際大会の開催に対して多大なるご指導・ご支援を賜り、誠にありがとうございます。私どもは1年以上の準備期間を経て、本年9月、無事に本会議の全日程を開催することができました。

「将来、国際的に活躍できるリーダーを仲間から輩出したい」「日本が世界をリードする形で、国際的なプラットフォームを作ることはできないだろうか」。私がこんな想いを抱くようになったのは、今から2年ほど前、大学に入学して半年が経った頃のことです。期待に胸を膨らませて大学に入ったものの、官僚的な大学組織、工夫のない講義、国際性の薄さ、そして何より「挑戦」を忘れた学生の多さに、不満を燻らせていた頃のことでした。既存の学生活動に満足できなかった自分が新たなプロジェクトを立ち上げるまでに時間はかかりませんでした。今思えば、目の前には無数の壁が立ちはだかっていました。

「どうせやるなら徹底的に挑戦的なことを」と考えた私はフォーラムの骨子を描き、周囲にアイデアを話し始めました。しかし、教授を含む50名以上の参加者を10カ国以上から集め、1000万円に到達しそうな予算のもとで、全くの素人が1週間以上にわたり国際会議を開こうというプランです。反応のほとんどは、予想通りではあったものの「本当にできるのか」「大それているのでは」「最初は小さくやったほうがよい」といった否定的なものでした。

そんな中、いつしか少しずつではあるものの、想いに共感してくれる仲間が集まり始め、昨年の夏、ついに運営組織を発足させました。運営組織は業務ごとに「企業・団体渉外」「大使館・相手国大学渉外」「プログラム策定・開催準備」と分け、徐々に活動を始めてゆきました。僅か10人ほどの運営スタッフがそれぞれ同時に複数の担当を受け持つ状態が続き、体力的・精神的に疲弊する者も1人や2人ではありませんでした。実現へ向けた強い想いと様々な方のサポートにより、約1年の準備期間を乗り越えることができました。

運営スタッフ以外でも、「人との出会い」に感謝しきりの1年でした。様々な方々のご指導やご支援なしには実現できなかった本会議ですが、とりわけ代表顧問に就任して下さった中小企業庁前長官の長谷川榮一先生（東京大学大学院教授）、ジョン・ボチャリ先生（東京大学教授）のお2人には絶大なご指導をいただきました。また、トヨタ自動車前副会長の中川勝弘氏（国際経済研究所理事長）、日本電気（NEC）の矢野薫会長、読売新聞東京本社の老川祥一社長、日本貿易会の市村泰男常務理事、駐日南アフリカ共和国大使の

ガート・J・グローブラー氏には重要なアドバイスを多く頂戴することができました。更に、住友商事の岡素之会長、伊藤忠商事の桑山信雄専務には、開催の半年以上前にもかかわらず大きな資金提供をご決断いただきました。このほかにも、数えきれないほど多くの方々のご親身なご指導・ご支援なしには実現できないプロジェクトだったと、改めて感謝しております。

会期中の様子については本報告書中に運営スタッフによる詳細な記録がありますので割愛させていただきますが、一つだけ、心に残ったエピソードをご紹介します。会期の終盤、学生参加者のスケジュールとは別に、私は各国から来日された先生方を大学にご案内し、長谷川顧問と先生方の会見を行いました。先生方はどなたも率直に考えを述べられる方ばかりで、それまで連日小さなトラブルがあっただけに「どのような批判をいただくか」と心配だったのですが、お一人おひとりに最大限の言葉で評価をいただくことができました。各国が大学を挙げて今後もこのプロジェクトを支援すると表明してくださったばかりか、ある参加国は、来年の開催をぜひ自国でやりたいとまで言い切ったのです。本会議前後の2週間は、運営スタッフ一同が文字通り「一睡も」する暇もないほど忙しく、手ごたえをつかむどころではありませんでしたが、その夜、普段厳しい顧問からお褒めのメールをいただいた時に初めて、手ごたえを感じることができました。

本会議終了後の展開も予想以上でした。会期終了から2か月以上が経った今でも、各国の参加学生たちは毎日のようにインターネットを使ってコミュニケーションを続けています。内容は、国際問題から私生活まで幅広いのですが、本会議という「きっかけ」を土台に、長期にわたる日々のコミュニケーションを通じて互いに切磋琢磨しあい成長する姿は、まさに私が思い描いていた通りのプラットフォームの姿です。

先日、来期の運営スタッフへの引き継ぎを行いようやく会頭から退くこととなりましたが、来期の本会議、そしてGNLFの未来のために、会頭を支えつつ今後も全力を尽くして参ろうと考えております。私たちは、一步一步、進んでゆきます。どうぞこれからも、皆様の温かいご指導とご支援をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

平成 23 年 12 月
ファウンダー・2010-2011 会頭
森下裕介 (東京大学文学部 3 年)

2. 設立趣意

21 世紀に入り 10 年が経ち、米国や中国といった超大国のパワーは、未だ世界を圧倒しています。しかしグローバル化が急速に進展するこの時代に、それ以外の国々が 10 年後、20 年後を見据え、未来の繁栄に向けて明確な意思を持ち、人材を育成しているかと問われれば、確実に不十分だと言えるはずです。

10 年後、20 年後、確実に世界の形は変化して行くその中で、政界、財界、学界などどのような分野においても、世界をリードするグローバル・リーダーが必要とされるでしょう。そして、その可能性は既存の超大国以外にも限りなく開かれています。これからの数十年は、劇的な社会構造の変化の中を、先進国はその生き残りのために、新興国は発展を確実にするために、途上国は発展を勝ち取るために、手を組める国々が戦略的にパートナーシップを結びつつ、共に補完的な役割を果たしながら繁栄を勝ち得ることが求められる時代だといえるでしょう。

すなわち今こそ、様々な地域・文化・社会構造を持つ国々がタッグを組み、ヒト・モノ・カネ・文化・情報の際限無き越境を前提としたこれからの時代を各国を代表して世界的にリードする「21 世紀型のグローバル・リーダー」達を、本気になって育て始めなければならない時期だといえます。

日本は外交があまり上手ではないことで知られていますが、「国と国との関係も、まず人と人の関係から」との観点から、各国の経済界・政界・学界・官界の支援と協力のもと、将来の世界を担う可能性と意思を持つ大学生同士の交流と研修を通じて、「グローバルな人脈」「グローバルな経験」「グローバルな知見」の3つを構築しることによりグローバル・リーダーに成長するための基礎を形づくる、そして活動を毎年積み重ねてゆくことによって次なるリーダー達の「層」を作ってゆく、このことを趣意として、このプロジェクトを設立し、実施することといたしました。

また、東日本大震災を踏まえ、「世界に対して、必要な情報を正確に発信する力」「世界の言論と行動をリードし、よりよい国際社会を構築して行くリーダーシップ」の必要性を改めて認識するとともに、当プロジェクトを何としても実施し成功させねばならないと、より強く考えるに至りました。

2011年4月

3. 開催概要、運営体制

会議名： グローバル・ネクストリーダーズフォーラム2011東京国際大会
(GLOBAL NEXTLEADERS FORUM 2011 TOKYO)

主催団体： グローバル・ネクストリーダーズフォーラム日本（学生団体）
事務局 東京都文京区本郷4-1-6 アトラスビル6階 IBIC本郷内

会期： 2011（平成23）年9月18日～24日（7日間）
※一部参加国は17日に来日、25日に離日

会場および宿泊地： 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 所管
国立オリンピック記念青少年総合センター
(東京都渋谷区代々木神園町3-1)

参加国（五十音）：

日本（ホスト国）／ケニア／サウジアラビア／タンザニア／チュニジア／ブルガリア／南
アフリカ／モロッコ／モンゴル

参加人数：

日本側学生30名（日本側運営委員13名を含む）

各国学生2名 各国教授または准教授1名（チュニジアのみ学生4名・教員2名）

モロッコ、モンゴル、サウジアラビアについては、教員が来日せず

議題：

「グローバル・リーダーシップ」

「2010年代の国際秩序」

「『資源』を考え、再定義する」

【後援】

外務省、文部科学省、国際協力機構(JICA)

【特別協賛】

カタール航空

【協賛】

三菱商事株式会社、住友商事株式会社、三井物産株式会社、伊藤忠商事株式会社、
豊田通商株式会社、社団法人日本貿易会、昭和シェル石油株式会社、石油連盟、
マクスウェル・グループ・ホールディングス株式会社、ユニリーバ・ジャパン、
スカイライト・コンサルティング株式会社

【助成】

国際交流基金、双日国際交流財団

【特別後援】

読売新聞社

【協力】

在日南アフリカ商工会議所、ソフィアクラブ、日本モロッコ協会、財団法人中東調査会、
公益財団法人 国際医療技術財団、財団法人日本国際連合協会、民間外交推進協会、
財団法人日本国際協力センター、日本アフリカ文化交流協会、NPO 国際交流推進センター、
駐日各国大使館

4. 運営体制

- 顧問教授： 長谷川榮一・東京大学公共政策大学院教授
ジョン・ボチャラリ・東京大学教養学部教授
林良造・東京大学公共政策大学院客員教授
- 会頭： 森下裕介（東京大学文学部 3 年）
- 事務局： 谷口大祐（東京大学教育学部 3 年）＊事務局長
山崎悠人（東京大学教育学部 3 年）
- パートナーシップ部会： 神田真悠（慶応義塾大学法学部 3 年）＊部会長
堀江友美子（東京大学法学部 3 年）
照下真女（東京大学教養学部 2 年）
田淵寛次郎（首都大学東京都市教養学部 2 年）
- メンバーシップ部会： 松本奈純（東京大学経済学部 3 年）＊部会長
松浦大記（東京大学文学部 3 年）
南部旭彦（東京大学教養学部 1 年）
- プログラム部会： 今岡証（首都大学東京都市教養学部 2 年）＊部会長
安井真（東京大学教養学部 1 年）
佐々木栞（東京大学教養学部 1 年）

5. 開催スケジュール

2011 年 9 月 17 日

- 8:00~9:00 ブルガリア（3名）到着@成田第二
- 11:30 ブルガリア一同を宿泊施設「パレスジャパン」に
- 11:30~17:30 都内観光（ブルガリア3名、運営スタッフ）
- 17:30 ブルガリア参加者が宿泊施設にチェックイン
- 19:00~21:00 夕食
- 20:50~22:00 タンザニア、ケニア、南ア（9名）が到着@成田第二
- 23:30 パレスジャパンに残り9名がチェックイン

2011 年 9 月 18 日

- 8:40 モロッコ・チュニジア（計9名）の学生が成田第二に到着
- 9:45 運営スタッフが開会式会場のAOTSに集合、会場準備
- 11:00 AOTSに国内、海外参加学生が集合
- 11:30~12:30 昼食@AOTS 食堂
- 12:30~13:30 頃 サウジ学生1名が成田到着
- 13:00~15:30 オープニング総会@AOTS 講堂
 - ① 主催者挨拶 … 会頭・森下裕介
 - ② ビデオメッセージ … 奥山恵美子・仙台市長、安住宣孝・女川町長（当時）
 - ③ 自己紹介（全員）
 - ④ オリエンテーション
- 16:00 バスでオリンピックセンターへ移動
- 17:00 オリンピックセンター到着、各部屋に移動
- 18:00~19:00 夕食@カフェテリアふじ
- 19:00~20:00 リアクションペーパータイム@各部屋
- 20:00~20:30 代表者会議（運営13名+部屋代表者）@D棟ラウンジ
- 20:30~ 部屋ごとに風呂へ(23:30で閉鎖)
- 20:30~21:30 運営者会議@D棟ラウンジ
- 22:00 頃~就寝

2011 年 9 月 19 日

- 7:00 全体起床
- 8:00~9:00 朝食@カフェテリアふじ
- 9:30 バスでオリンピックセンターを出発
- 9:55 NTT ドコモ本社（溜池山王）に到着
- 10:00~12:00 NTT ドコモにて企業研修
- 12:00~13:30 バスで都内を観光しつつ移動
- 13:45~14:50 昼食@江戸東京博物館 食堂（全員）
- 15:00~17:00 江戸東京博物館 見学（全員でビデオ鑑賞→館内自由見学）
- 17:10~17:40 オリンピックセンターへバス移動
- 19:00~21:00 公式レセプション@オリンピックセンター・レセプションホール
- 21:15~22:00 リアクションペーパータイム（記入後は自由に風呂等）
- 22:00~22:30 代表者会議@D 棟ラウンジ
- 22:30~23:30 運営者会議@D 棟ラウンジ
- 22:00 頃～ 各自就寝

2011 年 9 月 20 日

- 7:00 全体起床
- 8:00~8:40 朝食@カフェテリアふじ
- 9:00~9:50 総合セッション①@小ホール
- 10:00~10:50 総合セッション②@小ホール
- 11:00~11:50 総合セッション③@小ホール
- 12:00~13:30 昼食@カフェテリアふじ
- 14:00~14:50 総合セッション④@センター棟 311（控え室 300）
- 15:00~15:50 総合セッション⑤@センター棟 311(控え室 300)
- 16:00~16:50 総合セッション⑥@センター棟 311(控え室 300)
- 18:00~19:00 夕食@カフェテリアふじ
- 19:00~20:30 コミュニケーションタイム@センター棟 311
- 20:30~21:00 リアクションペーパータイム（記入後は自由に風呂等）
- 21:00~21:30 代表者会議@D 棟ラウンジ
- 21:30~22:30 運営者会議@D 棟ラウンジ
- 22:00 頃～ 各自就寝

2011 年 9 月 21 日

7:00 全体起床

8:00~8:35 朝食@カフェテリアふじ

9:00~10:15 資源セッション①@第一ミーティングルームとセンター棟 304

10:30~11:45 資源セッション②@第一ミーティングルームとセンター棟 304

12:00~13:00 昼食@レストランとき

13:30~14:45 資源セッション③@第一ミーティングルームと第二ミーティングルーム

15:00~16:15 資源セッション④@第一ミーティングルームと第二ミーティングルーム

18:00~18:50 夕食@カフェテリアふじ

19:00~20:30 コミュニケーションタイム@第一ミーティングルーム

20:30~21:00 リアクションペーパータイム

21:00~21:30 代表者会議@D 棟ラウンジ

21:30~22:30 運営者会議@D 棟ラウンジ

22:00 頃～ 各自就寝

2011 年 9 月 22 日

7:00 全体起床

8:00~9:00 朝食@カフェテリアふじ

10:00~11:45 ワークショップ@国際会議室

12:00~13:30 昼食@カフェテリアふじ ※座席表に従って 5 分前までに着席

14:00~16:00 ディスカッション@国際会議室

16:00~20:00 班ごとに自由時間（外出・観光可）

20:30~21:00 リアクションペーパータイム（記入後は自由に風呂等）

21:00~21:30 代表者会議@D 棟ラウンジ

21:30~22:30 運営者会議@D 棟ラウンジ

22:00 頃～ 各自就寝

2011年9月23日

7:00 全体起床

7:50~8:40 朝食@カフェテリアふじ

9:20~10:40 バスで鎌倉へ移動

10:50~11:50 高德院（鎌倉大仏）見学（全体で記念撮影）

12:20~13:20 鎌倉観光会館で昼食

14:10~15:10 鶴岡八幡宮見学

15:40~16:40 報国寺見学

16:40~18:20 バスでパーティ会場へ移動

18:30~20:30 クロージングパーティ・閉会式@UHA 浜松町

20:40~21:30 バスでオリンピックセンターへ移動

21:30~22:00 リアクションペーパータイム

22:00~22:30 代表者会議@D棟ラウンジ

22:30~23:30 運営者会議@D棟ラウンジ

22:00~ 各自就寝

2011年9月24日

この日は、各国学生の出国時間が午前中から深夜まで幅広かったため、運営スタッフおよび日本人学生が分かれて各国を担当し、時間に余裕のある国については終日観光を行った。

2011年9月25日

この日は、一部スタッフが前日に帰国していない南アフリカ(3名)を送り出し、全参加者が解散した。南アフリカの学生を送り出すころには、一部参加国から「母国に着いた」との連絡も入り始めていた。

6. 海外参加国・大学一覧

- ケニア： ナイロビ大学 (University of Nairobi)
引率：NJERU Enos H.N
学生：Reen Cera、Joseph Odawa
- サウジアラビア： キング・アブドゥルアジズ大学(King Abdulaziz University)
学生：Hassan Hussain Momenah
- タンザニア： ムズンベ大学 (Mzumbe University)
引率：ITIKA Josephat Steven
学生：Kelvin Mwita、Shangwe Glorie
- チュニジア： スース大学 (ISSATS)、国立政治学院(Ecole Polytechnique)
引率：ZITOUNI EP FAIZ Rim、MARZOUKI Kirmene
学生：Jouida Achref、MedAmine BSalah
Ameni Kecem、BEN SALAH Mohamed Amine
- ブルガリア： ソフィア大学 (Sofia University)
引率：NAYDEN Nikolay
学生：Victor Gadzhalov、Alice Anri Tsvetkova
- 南アフリカ： ヨハネスブルグ大学 (Johannesburg University)
引率：MOORE Candice Eleanor
学生：Mjakes Dipholo、Mia Snyman
- モロッコ： アル・アカウェイユン大学 (Al Akhawayn University)
学生：Loula Lamyee、Zineb Abbad El Andaloussi
- モンゴル： 東京学芸大学、東京外国語大学 (留学生)
学生：Amka Tsendsuren、Batdelger Tsevegmid

7. 講座・講師一覧

「アラブの春」の衝撃、中東・北アフリカの未来（総合セッション1）

2011年9月20日（火） 午前9：00～9：50

- ・田中浩一郎様（日本エネルギー経済研究所 理事・中東研究センター長）
- ・江崎智絵様（中東調査会研究員）
- ・マルズキ様（スース・チュニジア大学 助教授）

メディアの変貌、インターネットの台頭（総合セッション2）

2011年9月20日（火） 午前10：00～10：50

- ・松井正様（読売新聞本社メディア戦略局次長）
- ・平井卓也様（衆議院議員・自民党ネットメディア局長、元西日本放送代表取締役社長）
- ・ファイズ様（カルタゴ大学教授）

2010年代の国際的安全保障リスク（総合セッション3）

2011年9月20日（火） 午前11：00～11：50

- ・片山善雄様（防衛省防衛研究所 第一研究室長）
- ・キャンディス・ムーア様（ヨハネスブルグ大学）

国際機構の影響力、大国のパワーポリティクス（総合セッション4）

2011年9月20日（火） 午前14：00～14：50

- ・橋本靖明様（防衛省防衛研究所 第二研究室長）
- ・キャンディス・ムーア様（ヨハネスブルグ大学）

21世紀国際社会における地域共同体 その戦略、展望、課題（総合セッション5）

2011年9月20日（火） 午前15：00～15：50

- ・渡辺善宏様（国際通貨研究所専務理事）
- ・須網隆夫様（早稲田大学法学部教授）

金融・財政危機の先にある国際経済の姿（総合セッション6）

2011年9月20日（火） 午前16:00～16:50

- ・ 渡辺善宏様（国際通貨研究所専務理事）
- ・ 瀧口勝行様（元 日本開発銀行設備投資研究所 所長）
- ・ 河村小百合（日本総研 主任研究員）

資源セッション概略 2011年9月21日・22日

■Aブロック 伝統的資源シリーズ AM・PM：第一ミーティングルーム■

①「フクシマ」と原子力発電、そして再生可能エネルギーの未来

時間：09:00～11:45

講師：村上朋子様（日本エネルギー経済研究所 研究員）

山下紀明様（環境エネルギー政策研究所 主任研究員）

②21世紀における枯渇性エネルギー資源の役割と展望、そして戦略

時間：13:30～14:45

講師：伊原賢様（石油天然ガス・金属鉱物資源機構 調査部）

小林良和様（日本エネルギー経済研究所 グループリーダー）

③メタルをめぐる争い

時間：15:00～16:15

講師：村上進亮様（東京大学大学院工学系研究科 准教授）

■Bブロック 新資源概念シリーズ AM:センター棟 304、PM:第二ミーティングルーム■

①「海」をめぐる資源

時間：09:00～10:15

講師：谷伸様（内閣官房）

②生き延びるための資源～食料資源・水資源

時間：10:30～11:45

講師：大賀圭治様（東京大学名誉教授）

③新しい資源概念とその戦略

時間：13:30～16:15（変更あり）

講師：金子和夫様（日本総研上席研究員）

ンジェール様（ナイロビ大学）

イティカ様（ムンベ大学）

8. 日付別開催報告

9月17日（文責：松浦）

この日は、フォーラムの開会を翌日に控えて、ブルガリア、ケニア、南アフリカ、タンザニアの4ヶ国からの参加者（学生および教授）の計12名が先行して来日しました。成田空港への到着でしたが、早朝と夜間の出向かえには日本人の公募学生も積極的に参加してくれました。

最初に到着したのはブルガリアからの参加者3名でした。長旅の疲れにも関わらず、笑顔での対面となりました。

ブルガリア参加者の到着は朝8:00と早く、丸一日空き時間となるため都内を観光しました。秋葉原と浅草を訪れました。東京の新旧の文化を体験し、楽しんでくれたようです。残る、ケニア、南アフリカ、タンザニアの9名は夜7:20に成田空港に到着しました。カタル航空様から航空券のご協賛をいただき来日をしました。3カ国ともドーハから同一の航空便であったこともあり、出迎えた頃には既に打ち解けた様子でした。

列車で都内に移動し食事を済ませると、都内ホテルへのチェックインは深夜となりました。参加者の顔からは疲労が感じられましたが、皆笑顔を絶やさずにいてくれました。私自身としましては、この日到着したブルガリア、ケニア、タンザニアの4カ国の担当として参加学生および教授と連絡を取っていたこともあり、参加者との対面には感慨深いものがありました。航空券の選定にあたっては、出来る限り低価格の航空券としましたが、同時に、飛行時間や中継地での待機時間が最小限にとどまるものを選ぶようにしました。参加者の疲労に予算の制約下でできる限り配慮することができたと考えています。翌朝ホテルまで参加者を迎えに向かったときには談笑しているなど、本会議開会前に親睦を深めていたようです。本会議の開会を前に、よいスタートを切れた一日であったと思います。

9月18日（文責：谷口）

9月18日、一週間つづくグローバル・ネクストリーダーズフォーラム2011東京大会の初日を迎えた。開催初日最初のプログラムはオープニング総会、会場であるAOTS財団法人海外技術者研修協会東京研修センターに国内参加者、海外参加者、運営が一堂に会した。最初に集合したのは昼食の会場。お昼ご飯の弁当を食べながら、すでに日本人と海外の学生は同じ食卓に座り、交流を深めている。食事後は、講堂にてオープニング総会が開催された。会頭から始めの挨拶がなされた後、東日本大震災についての報告およびインタビュー

一映像を公開した。わたしの拙い英語によるプレゼンテーションではあったが、被災地の悲痛な傷跡を撮影した写真や、宮城県仙台市と女川町、二つの地域の首長が語る被災地の実情と復興への強い意志を記録したインタビュー映像によって、半年前に日本を襲った未曾有の災害について、海外の参加学生、教授方は強い関心を抱いていただいたようだ。そのあとは、参加者全員の自己紹介を各自順番におこなっていった。みながこのフォーラムに参加するにあたって感じる思いを各人抱きながら、自己紹介をしていく。その後、フォーラム開催に向けたオリエンテーションを行う。配布したネームプレートに各々名前を書き込み、また配布したしおりをもとに、一週間の動きと注意事項などを説明していく。そして、初日のメインプログラム、オープニング総会はほぼ定刻通りに終了した。

AOTSの研修センターを出て、フォーラム開催会場・東京代々木のオリンピックセンターに向かうため、バスに乗り込む。AOTS東京研修センターのある千住から、オリンピックセンターの位置する代々木までは、ちょうど山手線の円環を北東から南西へ横切る形で移動することになる。バスの窓から見える東京都心の光景に海外の学生や教授方は何度も目を奪われ、写真を撮影していた。

オリンピックセンターに到着すると、しばらくして夕食となった。夕食会場にて、出身国関係なく、日本人学生もアフリカの学生もブルガリアの学生も混同となって会話を楽しみながら夕食を楽しんでいる。食事後は、発表した部屋割りをもとに各人が自分の割り振られた部屋に入る。こうして、フォーラム初日のプログラムは終了した。

9月19日（文責・佐々木）

7時半起床。今日はオリンピックセンターでの初めての起床であり、外国人は前日のフライトの疲れもあったので、みんなが定刻通りに行動できるか心配だった。だが、日本人参加者の協力もあり、全ての部屋で定刻通りに起床できた。8時10分朝食。昨日の夕食に引き続き、イスラム食への対応にまだ慣れておらず、運営と日本人参加者が協力して説明した。バイキングだったので、全員食べるものに困ることはなかった。

9時10分バス停集合。点呼。NTTドコモ本社に向け出発。到着するとNTTドコモの社員の方が何人も待っていてくれた。外国人も含めた大勢の人を誘導するのはなかなか大変だったが、なんとか27階に全員到着。4つのグループに分かれ、見学。通信業界の現状とこれからについての説明を聞いたり、最先端の3D技術に触れたりした。日本人は展示品のドコモのケータイに興味津津だった。12時見学終了。バスに乗り込み、江戸東京博物館へ。途中で国会議事堂や衆参議員会館、レインボーブリッジを通るコースにしたため、それぞれを英語で説明した。

12時40分江戸東京博物館到着。到着が予定より早かったため、急遽隣にある両国国技館を外から見学。相撲を知らない外国人参加者もあり、日本人学生は説明に多少苦労していたが、本物の力士が何人も通りかかり、外国人学生は視覚で雰囲気を経験することができた。力士に写真撮影を求めると、快く応じてくれ、希望者は力士と写真を撮ることもできた。13時20分班ごとに分かれ、昼食まで自由見学。お土産を買いに行く班もあれば、江戸東京博物館の建物そのものに見入ったり写真を撮ったり話をしている班もあった。

13時50分江戸東京博物館内で昼食。イスラム食の人は蕎麦、その他の人は大江戸弁当を食べた。皆、食べ物、景色、おしゃべりを楽しんでいた。15時映像ホールで紹介ビデオを鑑賞。見学前に予備知識を頭に入れることにより、見学がしやすくなった。その後は自由に見学。外国人参加者には各国担当の学生が付き添った。展示品だけでなく、部屋の雰囲気そのものが江戸時代の日本を体現していた。

17時10分レセプションの準備のため、オリンピックセンターに向け出発。渋滞にかかり、到着が遅れる。18時40分オリンピックセンター到着。急いで会場準備、来賓対応。参加者はご協賛企業の方や各国大使館の方、各国関連団体の方とレセプション開始前にも交流できた。

19時過ぎレセプション開始。ご協賛企業の方、各国大使館の方からスピーチをいただく。私たちの活動を応援して下さるスピーチばかりだった。その後、来賓と参加者が交流。来賓の中には次の日やその次の日のセッションのパネリストの方もおり、事前に交流することができた。来賓も含めた全員で記念撮影をした。様々な国籍、人種の人が一堂に集って交流することができた。

21時レセプション終了。片付け。参加者はリアクションペーパー記入。部屋長は代表者会議に出席。次の日の日程について確認。各自お風呂などを済ませ、就寝。

9月20日（文責・今岡）

「本会議、3日目ということもあり、少々疲れ気味の皆さん。しかし、今日からプログラムで最も重要な、セッションの日が始まるということで、特に先生方は、緊張と期待の気持ちであるようでした。」

「本会議には、様々な文化的・思想的背景を持った国々の学生が参加します。当然、物事の見方や認識、意見も人によって全く違うことでしょう。しかし、1週間、同じプログラムを同じように受講し、参加することで、背景が違っても参加者が一つの枠組みを通し

て物事を考え、同じ土台の上で意見交換ができるような環境ができると考えております。本日のセッションは、総合セッション「9.11から10年」であります。本会議を開催する本年9月は、同時多発テロ発生からちょうど10年の節目となります。奇しくも今年、ビン・ラディン氏が死に、アラブでは民主化運動が巻き起こりました。テロから10年経った世界はどう変わったのか、現在私たちが直面している国際的課題は何か、新たな衝突要素は無いのか。各国の専門家の方々から学びました。」

9:00~9:50 総合セッション①『「アラブの春」の衝撃 中東・北アフリカの未来』

「総合セッション①では、講師として、Marzouki Kirmene 氏(チュニジア、スース・チュニジア大学助教授)、田中浩一郎氏(日本エネルギー経済研究所理事・中東研究センター長)、江崎智絵氏(中東調査会研究員)をお招きし、なぜジャスミン革命は起こったか、アラブ全域に、急速に広がった民主化運動、「アラブの春」後の各国における政治秩序、そして、アラブ民主化は国際社会のパワーバランスにどう影響を与えたか、などのレクチャーを受けました。」

10:00~10:50 総合セッション②『メディアの変貌、インターネットの台頭』

「総合セッション②では、講師として、平井卓也氏(衆議院議員・自民党ネットメディア局長、元西日本放送代表取締役社長)、Faiz Rim 氏(チュニジア ハビリテーション大学講師)、松井正氏(読売新聞本社メディア戦略局事業部次長)をお招きし、「これからのインターネット、ソーシャルメディア、そしてメディア」の話を中心に、ソーシャルメディアの急成長、その光と影、変化を余儀なくされる既存メディア、そして、インターネットが変える経済、金融、ビジネスといったレクチャーを受けました。」

11:00~11:50 総合セッション③『2010年代の国際安全保障リスク』

「総合セッション③では、講師として、Moore Candice Eleanor 氏(南アフリカ ヨハネスブルグ大学政治学科講師)、片山善雄氏(防衛省防衛研究所 第一研究室室長)をお招きし、「9.11 以後」の国際安全保障に焦点を当て、「ビン・ラディン後」のパワーバランスとテロリズム、「非国家勢力」のもたらす危険とそれに対する対応策、また、国際機構が安全保障に関して果たすべき役割と課題といった内容のレクチャーを受けました。」

12:00~13:30 昼食

14:00~14:50 総合セッション④『国際機構の影響力、大国のパワーポリティクス』

「総合セッション④では、講師として、Moore Candice Eleanor 氏(同上)、橋本靖明氏（防衛省防衛研究所 第二研究室室長）をお招きし、国際機構の役割と限界、課題という内容を軸に、誰が国際社会をリードし、国際秩序の形成を主導するのか、国際社会は国際的安全保障リスクにいかに対応するか、といった内容のお話を受けました。」

15:00~15:50 総合セッション⑤『21 世紀国際社会における地域共同体 その戦略、展望、課題』

「総合セッション⑤では、講師として、渡辺喜宏氏(三菱 UFJ 特別顧問、国際通貨研究所専務理事)、須網隆夫氏（早稲田大学法学部教授）をお招きし、20 世紀の地域共同体、EU の政策転換と未来戦略、共通通貨は可能か／第二の基軸通貨は登場しうるか、そして、地域共同体の課題と展望、果たすべき役割といったレクチャーを受けました。」

16:00~16:50 総合セッション⑥『金融・財政危機の先にある国際経済の姿』

「総合セッション⑥では、講師として、河村小百合氏（日本総合研究所 主任研究員）、瀧口勝行氏（元日本開発銀行設備投資研究所所長、エコノミスト）、渡辺喜宏氏(同上)をお招きし、2つのトピックを中心に金融・財政危機を扱いました。1つ目は、2007 年のサブプライムローン問題に端を発した世界金融危機であります。IT 技術や金融工学の発展に伴ってグローバル化・複雑化が急加速した世界の金融システムの、どこに問題があったのか。そして、経済活動の自由を保障した上で、今後どのような金融体制の構築が求められるのかが、主なテーマとなりました。2つ目は、EU 諸国や先進各国で深刻化する財政赤字と通貨の問題であります。特に、一時「第二の基軸通貨」と言われていたユーロの抱える制度上の問題と信用不安が深刻化するにつれ、基軸通貨や共通通貨といった概念そのものを再考しました。」

18:00~19:00 夕食

「一日中レクチャーを受け、疲れ果てたみなさんでしたが、夕食の時間になると元気いっぱい。学生同士も仲良くなりはじめました。」

19:00~20:30 コミュニケーション

「夕食後は、みな 1 つの大教室に集まり、グループを作るように机を並べ、お菓子パーテ

イーをしました。各国ではやっているゲームをやるグループや、踊り出すグループなど、グループごとに仲間との夜を大いに楽しんでいました。」

9月21日（文責・堀江、田淵）

8:00~8:35 朝食

いつも通り、8時から朝食をとりました。今日は2グループに分かれるため、学生は自分がどちらのセッションに参加するのか確認を行いました。

資源セッショングループ A

9:00~10:15 セッション1

原子力発電についてのレクチャーを受けました。今回の日本の震災で注目を浴びている原子力発電。この問題を日本現地で聴けるとあって、海外学生も注目していたようです。高い関心を持って聴講する様子が見られました。

10:30~11:45 セッション2

再生可能エネルギーについてのレクチャーを受けました。震災を受けてこの問題に対しても学生たちは強い関心を示していたようで、講師の方との闊達な意見の交換が行われました。

12:00~13:00 昼食

この日はいつもの食堂とは違う、オリンピックセンター内のレストランにて昼食をとりました。（昼食中も自然と国籍が違う人同士で交流が行われました。）

13:30~14:45 セッション3

枯渇性エネルギーについてのレクチャーを受けました。石油や天然ガスの採掘量は技術の進歩で年々採掘可能年数が延長しているといった、今後も枯渇性資源がエネルギーの主役として活躍する可能性の高さを学びました。特に発展途上国の国々の参加学生は自国の現状とリンクさせながら聴講する人が多かったようでした。

15:00~16:15 セッション4

メタルについてのレクチャーを受けました。メタルの生産方法から各国の産出状況、そし

てメタルの将来まで幅広く知識を蓄えることが出来ました。

資源セッショングループ B

9:00～10:15 セッション1

海洋資源についてのレクチャーを受けました。動画や写真を使った面白いプレゼンテーションでした。学生も非常に興味を持ったようで、休憩時間中にも質問が絶えず、また講師の先生とも記念撮影が行われるほどでした。

10:30～11:45 セッション2

食料資源についてレクチャーを受けました。人口増加によって食料の需要が増えているとともに、世界的に作付面積が限界に達していることや、バイオマス発電のために穀物が使われ始めて需要が高まったことなどから、食料需給バランスが壊れてきている現状を学びました。多くの学生にとってエネルギーとしての食料資源はなじみが薄いものであったようで、プレゼンテーションを真剣に聞くようすがうかがえました。

13:30～14:45 セッション3

セッション3では、地域資源について学びました。地域資源といっても、地域に資源となりうるものが存在するだけでは意味がなく、それをどうやって商品化するかアイデアを出す人、デザインする人、広報をする人、マーケットコンサルティングをする人など、さまざまな人材が関わって最終的に資源として活用することに成功するということを、講師の先生が関わった事例に沿って学びました。

15:00～16:15 セッション4

セッション4では、ケニアの教授であるイティカ先生とタンザニアの教授であるンジェール先生により、人材資源についてレクチャーを受けました。イティカ先生はグローバル化する国際社会において、多様なバックグラウンドを持つ人材をまとめるにはどうしたらよいか、またンジェール先生はリーダーとはどうあるべきかについて、その素質を列挙しながら教えてくださいました。学生も質問するだけでなく、自分の考えを述べてそれに教授が答えるという双方向的な議論が交わされました。また、リーダーであるだけでなく、ときにはよいフォロワーであることの重要性も指摘がありました。非常に白熱したセッションとなり、時間をオーバーしても質問が絶えず、学生の関心が高いことがうかがえました。

18:00~18:50 夕食

19:00~21:00 コミュニケーションタイム

この日は台風 12 号の影響で、暴風雨がふきあれており、首都圏の交通もすべて止まっていました。窓の外の光景に海外学生たちは従来持っていたイメージと違うと驚いていました。外出を極力少なくし、室内でのコミュニケーションタイムとしたため、無事怪我もなく過ごすことができました。コミュニケーションタイムでは各国の学生がそれぞれの国の民族衣装や音楽を披露しました。異国の文化や性格の違いが良く表れ、非常に盛りあがった時間となりました。

9月22日 (文責・照下)

9月22日プログラムの内容は以下のようなものであった。(簡略化して下記に記載)

【内容】

レクチャー① Professor Nayden (Bulgaria)

レクチャー② Professor Njeru (Kenya)

ディスカッション①・発表①

ディスカッション②③・発表②③

グループ毎に東京観光

午前中最初は、ブルガリアのネイデン教授より“Why is the interpersonal relationship important? (なぜ対人関係というものは重要なのか?)” というテーマを中心に講義を行って頂いた。民主主義の根幹をなすものはこの人間相互間の結びつきであり、その結びつき同士がコミュニティを形成したという歴史的背景の考察から講義は始まり、その後現代における外交関係などを例にとりながら講義は進んでいった。GNLFは「国と国との関係も、まず人と人との関係から」という理念のもと本会議を主催し、世界各国の大学生同士の交流を設け、まさに「対人」の関係構築を目的としている。その関係作りがなぜこれからの社会において重要であるのかという本会議趣旨を把握する上でもこの講義は重要なものであり、参加者たちの目的意識の向上にもつながったように思う。

午前中2つ目の講義はケニアのンジェール教授に行って頂いた。テーマは、“Leader as a human resource. (人的資源としてのリーダーとは)”であり、リーダーとは誰のことなのか、

リーダーに必要な資質とは何であるのかなど、本会議の一つの目的である「リーダー育成」を念頭においた講義を行って頂いた。講義の内容はンジェール教授ご自身の経験を基づいたものであり、具体的な例えやご自身の経験から、良きリーダーに必要なとされる能力や、どのような姿勢が求められているのかについて語られていた。ンジェール教授によると、良きリーダーとはまず明確なビジョンと戦略を持ち、目標達成に向けた使命を負った人物であることが挙げられるという。加えて明瞭であり、忍耐強く、利他的な性格を備えていることが望ましいが、全て日々訓練することによって自分に欠けている要素を補えるようになるものだという。こうした能力鍛錬と構築を行っていくことがまさに良きリーダーになるための手段であり求められていることだと強く語られていた。このリーダーについての講義後には参加学生と教授との間で積極的な質疑応答が行われた。カリスマ性を備えたリーダーであっても実質行っていることが一部に害を与えるような場合は良きリーダーと言えることができるのか、といったような疑問を率直に尋ねる学生も多く、学生と教授との積極的な意見交換が行われた点で非常に有意義であったと思う。

上記2つの講義はいずれも本会議の開催趣旨を理解し総括していく上で重要な講義であり、それらを踏まえた上で午後からは6つのグループに分かれてディスカッションとグループ発表を行っていった。グループディスカッションのテーマは以下の3つであった。

1.To be "a good leader", what do we have to do right now / what can do now as students?

(「良きリーダー」になるために、今私たちは何を行うべきか/学生として何ができるのか。)

2.What is the nature of the advantage "resource" have? What are the advantages of your country? How do you recognize the advantages of other countries? To share the advantages and utilize them, how can we cooperate and collaborate with them?

(「資源」保有国の利点とは何か？(よく分かりませんでした。)自国の有利性にはどのようなものがあるか？どのように他の国々の有利性を認識しているか？それらの有利性を共有し、用いていくためにどのように協調したり共同したりすることができるか？)

3.20 century was called "The century of Petroleum". That means, the most politically and economically important resource was petroleum among all kinds of resources (not only among energy resources). From the point of view, 21 century is "The century of WHAT"?

(20世紀は「石油の世紀」と呼ばれた。それは、政治的にも経済的にも全ての資源の中

において(エネルギー資源に限らず)最も重要な資源が石油であったことを意味している。では、その観点からすると21世紀は何の世紀であろうか?)

時間の都合上、Q1についてはグループディスカッション30分、発表各グループ5分ずつを目途に行い、Q2,3は合わせてグループディスカッション90分、発表7分ずつの時間配分で行った。深い議題に加え、長時間にもわたるグループディスカッションとなったが、話し合いが停滞することはなく活発的な意見交換がどのグループでも見られ、特にQ2では、各国の学生が自国の資源について意見を述べたり、情報を共有したりということがどのグループでも見られた。グループごとのディスカッションのまとめは各グループから1人ずつ選ばれた代表者が壇上で発表した。「資源」というものをグループ内で再検討し、目に見えるものと目に見えないものという分類した上で、前者にはエネルギーや自然資源、後者にはテクノロジーや情報資源などがあり、それらを他国間で共有する際には両国ともに利益が得る状況を作ることが必要である、というような独自性に富んだ視点から発表するところもあれば、資源とは使用され、有益で、必要とされているもの、と定義した上で他国と資源をめぐる協調し共同していくには、知識の交換や経験の交換など様々な相互間の取引を活発にしていくことが大事だと発表するところもあり、深い議論がグループ内で積極的になされていたことが発表から窺えた。またQ3の答えとしては、21世紀を「テクノロジーと情報」の世紀、「新エネルギー」の世紀などが挙げられた。中には、「~の世紀と1つの名称に絞ることができない」世紀と答えるところもあり、「資源」という言葉の多様性について本会議を通じて学んできたからこそ、その多様性の上に成り立つ世紀と捉えられるようになったのではないかと思う。

講義による受動的な知識吸収だけでなく、グループディスカッション、発表といったような活発な意見交換を学生間で行う場を設けたことは、今本会議の開催趣旨理解の促進につながったことに加え、学生間の相互理解も一層深まる機会となったように思う。

全グループディスカッションと発表が終わった後は、部屋ごとに観光や買い物に出かける自由時間を設けた。開催期間中、まとまった自由行動時間というものがこの時間しかなかったため全ての参加者は部屋ごとで思い思いに自由時間を過ごしていた。特にオリンピックセンターから近い渋谷に観光に出かける部屋が多く、海外からの参加者たちは日本の若者文化の中心地の様子に驚いたり、自国とは異なる雰囲気仲間とともに楽しんだりしている姿が見受けられた。最終日も間近に控え、わずかとなってしまった仲間と一緒に過ごせる時間を十分楽しみ、思い出作りにもなる時間を過ごすことができた。

9月23日（文責・山崎）

9月18日にフォーラムが始まって以来、19日は一日中研修を行い、20日～23日は一日中講義を聞き、ディスカッションを行なってきた。参加学生にも連日の疲労が溜まっている頃合いだろう。実質的な活動としては最終日となる23日は、学習の疲労に対する気分転換の意味も込めて、観光日とした。

観光地を決めるに当たり、世界中の国々から学生が来ていることから、日本独自の文化を味わうことができること、また、観光気分を感じる必要があるという点から、東京からある程度距離が離れていることの2点を重視した。その結果、鎌倉が最も適当な観光地ということに満場一致で決定した。かつて日本の政治の中心地として幕府が存在し、日本の文化史において非常に重要な役割を果たした仏教と神道を象徴する、寺院や神社が多数存在すること。バスを利用して日帰りで観光するには適切な距離であることなどが、理由として挙げられた。

最初に大まかな行程を紹介すると、朝食後、バスで鎌倉に移動。鎌倉大仏殿高徳院を見学し昼食を取る。昼食後は鶴岡八幡宮、報国寺を見学する。その後、バスで浜松町に向かい、パーティ会場で最終日のクロージングパーティーを行うという行程だ。

それでは、具体的な行程を時間順に振り返っていく。

鎌倉観光

オリンピックセンターのある代々木から鎌倉まで、バスで1時間程度かかる。新宿から高速道路に乗りしばらく経つと、徐々に建物の高さが低くなり、数も減っていく。東京都心から神奈川県にかけて移動しているためだ。海外学生にとっては、空港以外では初めて東京都の外に出たことになる。しかし、いくら建物の数が減ってきたとはいえ、ある程度の規模をもって街並みが続き、街並みが途切れれば工場地帯が眼前に連なる。結果として建造物の絶えない景色は、海外学生にとっては「トーキョー」を抜け出たという意識を感じさせないのかもしれない。横浜に差し掛かると、ポートサイド地区の高層マンションや、みなとみらい21地区の高層ビルが姿を表す。東京都心から数十分走行しただけで再び都会の景色が広がることに、驚きを感じた学生も多いだろう。「トーキョーのすぐそばにこのような大都市があるが、ここはトーキョーに含まれるのか」といった質問もあったほどだ。横浜の中心部を過ぎてしばらくすると、緑が広がるのどかな景色となる。高速道路を降り、休日の混雑を抜け、10時過ぎに大仏のある高徳院へと到着した。

1、鎌倉大仏殿高德院

大仏を最初の目的地として選んだ理由は単純で、外国人にとっては一目見たら忘れられないインパクトがあり、集合写真も取りやすい。日本人である私たちは大仏を見慣れているが、初めて日本に来た外国人が見たらどのような印象を受けるのだろうか。日本に来て初めて、日本文化を感じさせる施設を実際に訪問したということで、海外学生は大盛り上がりである。思い思いにひたすら写真を取るの、運営学生としては、集合写真を取るために一同を集合させることだけでも大変であった。昼食の時間との兼ね合いがあるため、大仏の中に入ることも、境内にあるお土産を見てまわる時間が無かったことが残念だ。

昼食は高德院の正面にある観光会館で取った。観光客の団体を積極的に受け入れている店で、外国人向けのメニューもあり、非常にご丁寧な対応をいただいた。鳥御飯の定食で、質・量とともに海外学生にとって満足であっただろう。昼食を食べ終わった人から、バス移動の時間まで自由時間とした。多くの学生が、観光会館の近くにあるお土産屋を見て回っていた。次の目的地は鶴岡八幡宮である。

2、鶴岡八幡宮

市街地の中心に位置し、鎌倉に数ある寺院や神社の中で最も有名なものが、この鶴岡八幡宮だ。初めて鎌倉観光に来た人々が訪れる観光地として、はずすことはできない。海外学生にとって、このフォーラム全体の行程の中で最も「日本的なもの」を感じるのが、この鶴岡八幡宮ではないだろうか。勿論、寺院は仏教から成り立ち、神社は神道から成り立っている。日本人ですら、両者の特徴を混同している人がいる。確かに仏教は世界宗教であるが、神道は日本独自のもので理解するには勉強する必要がある。外国人にとっては、予備知識がないと、寺院・大仏と、神社の間にどのような思想上の違いがあるのかを意識することは難しかったのかもしれない。しかし、この鶴岡八幡宮という神社が醸し出す独特の神聖な空気は、海外学生がこの場所こそが日本文化の真髄であると実感するには十分なものだろう。

鶴岡八幡宮に到着すると、学生は2班に分かれ、交互に拝殿に向かい礼拝を行った。お賽銭を投げ入れ、礼拝をするという日本文化体験だ。当日は幸運なことに、境内で結婚式が執り行われていた。日本独自の伝統的な結婚式である神前式を目の当たりにして、海外学生は目を輝かせていた。日本人の私たちでさえもあまり目にする機会がないのだから、海外学生が盛り上がるのも当然であろう。結婚式が行われていた舞殿には人だかりができ、新郎新婦も恥ずかしかったに違いない。このような偶然の機会にも恵まれ、鶴岡

八幡宮の見学は満足のいくものとなった。

鶴岡八幡宮の見学が終わると、再びバスでの移動となる。鎌倉観光最後の目的地は、報国寺だ。

3、報国寺

報国寺は、高徳院の大仏や鶴岡八幡宮と比べると、観光客に対する知名度という点で劣る。しかし、知る人ぞ知る観光スポットとして、事前合宿で訪問した時以来、報国寺を観光に組み込むことを熱心に検討した。観光地としての報国寺の一番のポイントは、寺院ではなく、竹林の庭である。竹の寺と呼ばれるほどに有名なその竹林は、外国人にとっても受けが良いと聞いていた。竹林が空を遮るように隙間なく生えており、日光の届かない独特の空間を創り出している。鶴岡八幡宮が、神社建築のもたらす神聖な空気により「日本的なもの」を感じさせるとしたら、この報国寺は鶴岡八幡宮とは異なる方法で、同じく「日本的なもの」を感じさせる。理由の一つは、竹という植物自体がヨーロッパやアフリカに見られないこと。もう一つの理由は、そうした珍しい竹という植物が、自然との調和を基調とする日本式の庭に生い茂っているということが考えられる。こうした竹と庭園との調和は、アフリカから来た多くの海外学生にとっては、初めて見るものだろう。決して派手ではなく、整然と秩序立って自然に手が加えられているわけでもない庭園だが、誰もが美しいと感じる。そうした趣こそが日本的な美であると、海外学生は皆感じ取ってくれたのではないだろうか。

報国寺の境内自体はあまり広くなく、全員で竹林の庭を一周した。時間があれば、交代で境内にある茶屋で一息つくことなども考えられたが、あいにく休む時間はなかった。

報国寺の見学が終わる頃には16時をまわっていた。クロージング・パーティのために、バスで浜松町に戻る。東京と鎌倉の間にはある程度距離があるので、どうしても時間の制約上、これら3施設しか回ることができなかった。とはいえ、寺院と神社の双方を見学することができ、日本の文化を実際に観光地を訪問して味わうという目的は完全に達成することができた。鎌倉には、渋谷・原宿のように若者の活気が溢れる繁華街もなければ、お台場のように海を望む近未来都市といった華やかさもない。しかしそれでも、海外学生にとっては新しい体験の連続であり、華やかな都心の娯楽に負けず劣らず魅力的な場所となりうる。観光に出発する前は、行程・内容に関して懸念点がたくさんあったが、特に大きな問題もなく、参加学生も満足してくれたようで、胸を撫で下ろした。

浜松町に向かうバスの中では、さすがに疲労がピークに達したのであろうか、睡眠を取る学生が大半であった。しかし行程は容赦なく、参加学生が一人一人、フォーラム全体の感想をスピーチする時間となった。全員がスピーチを終える前に浜松町に到着してしまったので、続きはパーティの欄で書くことにする。

クロージング・パーティ

浜松町のパーティ会場を貸し切り、最終日の夜ということでクロージング・パーティを行った。19日の夜に行われたレセプションパーティはフォーラム全体を代表するパーティであり、協力団体や協賛企業の方をご招待したが、今回のクロージング・パーティは参加学生と教授のみで行われた。料理を食べつつ学生同士の交流を深めるということに留まらず、学生によるスピーチが行われた。

まずは、浜松町に向かうバスの中でスピーチをし終えていない運営メンバー以外の学生がスピーチを行った。今までのフォーラムの過程で聞くことができなかった、参加学生のGNLFに対する想いを聞くことができた。そのどれもが、一年間準備をしてきた運営メンバーにとってフォーラムの成功の確信を感じさせるもので、とても暖かく感じられた。

次に、運営メンバーの学生が壇上に立ちスピーチを行った。一年近くの努力が凝縮されたそのスピーチの途中、思わず涙を流すメンバーもいたほどだ。

最後に、海外教授の方々のスピーチである。こちらも参加学生と同様に、フォーラムの成功を称えるありがたい言葉をいただいた。また、次回の開催地など、今後のGNLFのあり方について指針となるご提案をいただいた。

参加学生・教授によるフォーラムの感想スピーチが終わった後は、GNLF事務局長の谷口より、フォーラムの総括スピーチが行われた。研修日では実際にNTTdocomoや江戸東京博物館に訪問することで、日本の先進技術・伝統的文化について体験をし、講義では現代の国際問題・資源問題について知識をつけ、ディスカッションではそうした体験や知識に基づいて、自らの考えを議論を通じて深めていった。この一連のフォーラムの行程を通じて、参加学生が最終的に、将来へ向けてどのようなことを身につけたのかについて総括をするスピーチとなった。

集合写真を撮影してパーティは終了した。このクロージング・パーティの終了をもって、フォーラムの全行程が終了したことになる。残されている行程は明日以降の海外学生の見送りだけとなる。運営学生にとっても、参加学生にとっても、また、海外教授にとっても、最後にふさわしいパーティとなった。

以上が、23日の行程である。観光日でありながらも、観光・パーティと盛りだくさんの内容で、ますます学生を疲れさせてしまった。しかし、大きな問題もなく、無事にフォーラムの全行程を終了でき、運営一同はこの段階でようやく一息つくことができた。大きな問題がないどころではなく、運営メンバーも驚くほど予想以上に成功した。クロージング・パーティ終了後、バスの社内で、数人の海外学生が帰りたくないと言っているのを聞き、その成功の大きさを改めて実感した。後は、すべての学生が無事に帰るのを祈るばかりである。

9月24日（文責・神田）

24日の朝は、全参加者（モンゴル除く）で顔を合わせる事の出来る最後の時間となりました。連日の疲れにもかかわらず、朝早くから起き出してお土産を渡したり別れの言葉を告げる学生の姿も見受けられました。「サウジアラビア・チュニジア・モロッコ？」の学生は午前中の出発を控えていたため、運営スタッフ・日本人学生に付き添われながら8時にはオリンピックセンターを出発し、成田空港へ向かいます。残る学生は先日までと変わらず、食堂「ふじ」で朝食をとりました。最終日という事も考慮してチェックアウトまで比較的ゆとりのあるタイムスケジュールを組んではいたのですが、さすがに毎日ハードな生活を送っていて疲れが積もっていたのか朝食を抜いて部屋で睡眠をとるという選択をした参加者も多く見受けられました。

その後、1週間に渡って使用していた部屋の掃除や荷造りなど一連の片付けを終えて無事チェックアウトを済ませると、いよいよ待望の東京観光の時間となります。フォーラム期間中に行われたセッション時間の微調整と、参加者の強い希望とがあって実現した最終日の東京観光プログラムですが、お土産を買いたいという声と、参加者と同世代の東京の学生がどのような街でどのような暮らしをしているのかを見て欲しいという運営側の想いと両方を勘案し観光先は原宿～渋谷界限となりました。

「日本人参加者、ブルガリア・南アフリカ・タンザニア・ケニア」の学生は大きな荷物はオリンピックセンターに預けて参宮橋から原宿まで電車で移動し、その後は日本人学生と海外学生3~5人で1グループとなり、自由に原宿を巡りました。それまでの日程の中で浅草・秋葉原や夜の渋谷に出掛けたことのある海外学生も、お昼の時間帯に若者の街に繰り出すのはこの日が初めてという事で、各自お土産を買ったり、原宿を歩く若者のファッションスナップを撮ったり、竹下通りでコスプレカルチャーを目の当たりにしたり、原宿

名物のクレープを食べたりと充実した様子で街歩きを楽しんでいました。とはいうものの、日本の物価は海外学生にとってやはり高いようで「せっかく自分の国でまとまったお金を降ろしてきたのに、日本の物はどれも高く欲しいものがなかなか買えない」といった声も聞こえてきたのもまた事実です。日本人学生が海外学生にお土産をプレゼントする、といった光景も散見されました。

一通り原宿の雰囲気味わいきった頃、全員で集合して遅い昼食をとりました。海外参加者の予算の都合上、日本らしいものを食べるというわけにはいかなかったのですが、ごちんまりとしたテーブルが一層距離感を縮めてくれ、2時間にも渡る充実した昼食の時間となりました。そこでは「いかにしてGNLFを永続的な組織にしていくか」「各国の支部局はどのように運営していくべきか」「今後の開催にあたって、お金の問題はどのようにするか」「卒業生組織として未長く私達を繋ぐ仕組みとはどのようなものか」といったように、自分達の繋がりを維持し、また、この取り組みを未長く継続していくための方法を各国の学生の課外活動事情などを交えながら話しあいました。この時、運営側が話を振ったわけではなく、参加学生たちが自らこの組織・繋がりの未来についての話をしだしたところが非常に印象的です。

昼食を食べ終えた後は一度オリンピックセンターに戻って各自スーツケースを受取り、夕刻に迫った出国に向けて場所を日暮里に移しての飲み会となりました。海外学生にとって居酒屋での飲み会というのはやはり珍しい体験らしく、均一価格という料金システムや凝った和風の内装に興味を抱いたり、日本酒の味に挑戦したりと居酒屋文化を楽しんでいたようです。ここでの食事が日本・海外の参加者が共に過ごせる最後のものであったため、心中の寂しさを紛らわす意味も込めて日本での最後の夜を完全に楽しみ尽くそうとしているような盛り上がりでした。また、会期終盤ともなるとお箸を使いこなす海外参加者や「いただきます」という日本語を覚えた学生も現れ、日本人学生が称賛の声をあげているような光景も見受けられました。

楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、気づけばスカイライナー出発ギリギリの時刻になっていました。皆でスーツケースを引きながら、お店を出てから乗車までずっと走り続けたのも良い思い出です。車内では疲れ切って睡眠をとったり会話に興じたりと皆それぞれ思い思いに過ごしていましたが、その一方で座席の端でNayden教授とGNLF代表の森下は、チュニジア開催を含めたGNLFの今後の在り方について長い間真剣に話し合いをしていました。

成田空港に到着し、朝一でサウジアラビアなどの学生を見送って以降ずっと空港ロビーにて待機していた日本人学生と無事に合流、本会議期間もいよいよ終わりに近づきます。

チェックインの時間が迫ってくると、参加者はそれぞれ「また絶対会おう」「Facebookでも連絡をとろう」「私・僕の国に遊びに来てくれたら案内するよ」など口々に、今後も交流を続よという意志を確認しながら別れの言葉を交わし合っていました。搭乗ゲートに向かう途中で参加者たちは何度も振り返って手を振ったり、「We love Japan」と書かれた看板をこちらに掲げたりしており、この1週間に渡るフォーラムを通して日本という国、そして日本人である私達のことを心から好いてくれたのだということを実感することができました。

9. 運営を終えて（運営スタッフ所感）

谷口大祐

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2011 東京大会が開催されるおよそ一年半前、グローバル・ネクストリーダーズフォーラムはその産声を上げました。当時は、日本とアフリカの国々とのリーダーシップ・パートナーシップを築き、育てていくことを目的とした「日本アフリカ学生会議」という形で団体が発足しました。わたしの最初の仕事は、団体の活動理念・目的を文章化することだったことを、今でもよく覚えています。発足当時の団体構成メンバーは森下（現会頭）・谷口（現事務局長）のわずか二名しかおらず、団体の始動に当たって、メンバーの補充が最優先にして行われました。団体のホームページを通じて応募してきた参加希望者の面接をしていく中で、はじめて、身内の馴れ合いから、同じ志を持った仲間たちの集まりに昇華したような感覚を覚えました。こうして、グローバル・ネクストリーダーズフォーラムはその第一歩を刻んだのです。

そうして昨夏から、グローバル・ネクストリーダーズフォーラムは、フォーラムの開催に向けて少しずつですが、動き始めました。冬までに、フォーラムのテーマについての会議、大使館や関連団体など外部の団体との積極的な交流、メンバーの随時補充などがこの期間に行われ、団体は組織として機能するようになってきました。フォーラムについて構想、企画していく中で、アフリカの国々だけではなく、日本では普段なかなか交流できない世界中の国と交流するいい機会なのではないかという考えに至り、この時期に、団体はグローバル・ネクストリーダーズフォーラムと正式に名を改めました。そしてついに来夏のフォーラム開催に向けた企画書第一版が完成し、年明け、2011 年にはいると、グローバル・ネクストリーダーズフォーラムは、2011 年 9 月開催に向けて、本格的に始動しました。企業や団体への協賛・後援のお願いも本格的に開始され、初めてそういったことを経験する私たちは、はじめのうちは何も分からず、ただただ緊張することしかできませんでした。一步一步進んでいっているのは確かでしたが、まだ果てしなく遠くに見えるゴールに、具体的なイメージが持ち切れないメンバーも少なからずいたことかと思えます。

そして、今春、新たに四人の新メンバーが加入し、合計 13 人の新体制となりました。新入生歓迎期である四月・五月は、新メンバーの補充と、フォーラム開催に向けた様々な渉外が並行して行われ、半年後に迫ったフォーラム開催に向けて、計画が綿密に練られ、一日一日が日々重要になっていくのを感じていました。何回かの新入生歓迎コンパを企画し、新入生の獲得を目指し、食事やカラオケを通じて、交流を図りました。多くの学生が興味を持ってくれましたが、最終的には、四人の学生が正式に参加することになりました。五

月末には、東京大学本郷キャンパスにて、南アフリカ共和国とコソボ共和国の二国の駐日大使をお呼びして、約 100 名の観覧者を前に、大変貴重なご講演をしていただきました。当日は、大雨の降る中、大使のご両名にはご足労いただきました。『駐日各国大使と考える日本の未来』と題うたれたこのシンポジウムには、様々な年代の方に観覧してもらい、大変有意義な企画をおこなうことができました。

六月、この時期には、国内の受け入れ準備だけではなく、海外の参加国との交渉も一山を越え、また、新メンバーも最終的に確定され、団体の体制が再度編成されました。グローバルネクストリーダーズフォーラムは、協賛や後援いただく国内のステークホルダーとの渉外を担当するパートナーシップ部会、海外の参加者や協力いただく大使館などの関連団体との渉外を担当するメンバーシップ部会、フォーラム開催中のプログラムの構成や、そのパネリストなどとの渉外を担当するプログラム部会の三部会を大きな柱として、フォーラムが終了するまで、動くことになりました。六月中ごろには合宿も行われ、上級生と新入生の交流が図られ、また、メンバーによる資源についてのプレゼンテーションなど勉強会としても今後の活動にとって意味あるものとなりました。

七月、この一カ月は団体にとって大きな山場だったと思います。協賛や後援、海外の学生の参加が決まり始め、航空券の購入も開始されると、残り三ヶ月ということも相まって、団体の中では、フォーラム開催というものが急激に一層「濃く」なったように思われました。特に航空券の購入に携わっていた身としては、毎週綿密に打ち合わせした後、数時間の電話の末に何十万という金額を使って航空券を購入していくという過程は、わずか三ヶ月後に控えた団体の集大成への大きな一歩を感じるとともに、仲間が数カ月かけて築き上げた協賛金という努力の成果を切り崩してしまっているという後ろめたさを同時に感じていました。読売新聞社さんの特別協賛で、我々の活動の紹介及び参加者募集の記事を掲載していただいたのも、この七月でした。この記事が大学の図書館で見つけ、また、この記事を読んで参加を希望した、というメールを見たときには、自分たちの活動が広く、全国に広まったことに感動する一方で、まるで、自分たちの活動が自分の手の届かないところにいつてしまったかのような感覚にとらわれたこともありました。団体の他のメンバーもそれぞれに何か感じるものがあったと思います。今振り返って考えてみれば、この時期の活動は、とても危うい状態での綱渡りで、なんとか無事に八月に入ることができたような気がします。一人ひとりのメンバーが再度自分とグローバル・ネクストリーダーズフォーラムというものを見つめなおした一カ月だったのではないのでしょうか。

そして、グローバル・ネクストリーダーズフォーラムの開催は、八月、一月半にまで迫って来ました。この時期には、パートナーシップ部会では協賛・後援のほとんどが、メン

バーシップ部会では、参加者と航空券のほとんどが、プログラム部会では、プログラムの詳細とそのパネリストの大枠が決定し、各部会での仕事の一つの大きな山を越えました。一方で、どの部会にも属していない、宙に浮いた状態の問題が多く噴出してきました。残りひと月をきることとなった八月中盤以降は、ネット上では毎晩遅くまで、状況の報告・確認や、未解決な問題の提起、タスクの再配分がおこなわれました。Skype を利用して、リアルタイムで、ある問題についてメンバーで共有し合い、対応する人と対応の期限を設けて、日々状況を更新していくといったことが毎日繰り返されました。Skype を利用した情報共有と状況理解の体制は、この後、フォーラム開始直前まで続けられることになり、我々の活動のベースとなっていました。

そして、九月、最後の調整が行われました。日本国内の参加者や大会開催中のパネリストとの打ち合わせ、プログラムのシミュレーションと再調整、海外参加者との調整など、開催までの 17 日間は行きつく暇もなく過ぎ去り、一日の経過の早さを嘆くばかりでした。日々めまぐるしく問題が発見されたり、新たな問題が浮上したりと、刻々と状況が変容していった開催前最後の一週間は、目前に迫った、開催のことをゆっくり考える暇もないほど忙しかったように思います。私は、この時期に単身宮城県に取材に行かせていただきましたが、この二日間東京を、そして本会議の準備を離れることさえ惜しまれるほどでした。アポイントメントの依頼から、取材、撮影、編集、発表まで携わったこの宮城県への取材はわたしにとっては貴重な体験でした。宮城県へは、今年の三月におこった震災と復興に関して是非ともお話しいただき、海外の学生や教授に聞いてほしいと考え、企画・立案されたものでした。震災はこのフォーラムが設立された当初は、もちろんのことですが、考慮されていない事態でした。フォーラム開催に向けて活動していた最中におこったこの未曾有の大災害は、わたしたちの活動にも少なからず影響を与えました。企業に協賛の願いをしていたわたしたちは、震災に伴う社会不安から、協賛金が予定通り集まらないのではないかと危惧しました。震災や、それに付随した原発事故で、多くの外国人が国内から去っていくのを目の当たりにして、わたしたちは、海外から学生や教授がやってこないのではないかと不安になりました。結果として、余震も続き、震災の爪痕が強く残るあの状況で開催できたのも、企業や大使館など、多くの方々のご尽力によるものですが、2011 年に日本でフォーラムを開催するにあたり、震災について考えないのは間違っているという思いがわれわれに芽生えました。その結果、宮城県の仙台市長、及び女川町長のお二方から貴重なお話をいただき、海外の参加者に被災地の悲惨な状況と、そして被災者の強さを伝えることができました。

そして、9月18日日曜日、いよいよフォーラムがはじまりました。この一週間の詳細は

ここでは省略させていただきますが、日々がとても密度の濃く、しかしあっという間に過ぎた一週間でありました。開催前にもいろいろなことを考え、学びましたが、殊、開催中にはさまざまな場面で、交流の面白さ、そして難しさを感じました。その一週間は、長い間時間と情熱を注いできたことからすれば、ふさわしく実りあるものであり、今思い返してみれば、まるで夢のように短すぎる日々でした。われわれがこのように感じることできるフォーラムが開催できたのも、関係者の方々のご協力があったこそだと思います。数多のご協力、誠にありがとうございました。

神田真悠

国境を越えて学生と関わりたい、という漠然とした想いだけに支えられてスタッフになることを決めた昨年の秋。既に動き始めている組織の中に、知り合いもほとんどいない状態で入っていくことはワクワクすると同時に疎外感を伴うものでもありました。それから1年、多くの挑戦や困難を経験していく中で、私の中に存在した曖昧な想いは確固たる夢となり、共に働いた仲間とは一生涯付き合っていきたいと思えるような深い関係を築く事が出来ました。まず何より、その機会と出会いを提供してもらえたことに感謝したいと思います。

団体に入って初の大きな思い出は南アフリカ商工会議所主催のクリスマスパーティーへ参加した事です。南アフリカに関係の深い外国の大使館や企業の方も大勢いらっしゃる中、学生の立場から活動についてアドバイスを頂いたり「アフリカ」という言葉を介して会話を広げたりすることは当時の私にはとても骨の折れることでした。それまで「学生時代、色々な国と関わりを持つような活動をしたい」と豪語していたにもかかわらず、国籍や世代、言語の違う方が相手となると共通の興味関心を通してでさえ会話をするのがこんなにも大変になるものなのかと、以後の活動内容を考えて恐ろしくなった記憶があります。

実際に企業を中心としたご協賛のお願いや大使館へのご協力のお願いが始まると、その予感が的中していたことを感じずにはられませんでした。大使館へ訪問すれば、緊張した雰囲気の中、団体の概要説明に始まって政治経済の用語も含まれるような英会話がノンストップで30分、1時間と続いていきます。必死でメモを取っている中で不意に向けられるスモールトーク調の質問に、焦って冷や汗を書いたのも今では良い思い出です。

渉外活動の中でも私が中心となって担当していたのは、企業・法人へのご協賛依頼でした。名刺の受け渡しの作法も分からないところからはじまった訪問活動ですが、一緒に訪問に付き添った友人の話し方を参考に、家で企画書の説明の練習をした時期もありました。そのうちに1人ででも進んで渉外に行くようになり、お話をすることで更なる説明が必要と判

断した場合には自分で資料を作り、組織の理念や活動に対する自分の想いを掘り下げて考えて伝える工夫をし、気づけば時に後輩にもアドバイスをするようにまでなっていました。その中では勿論、沢山の失敗をし、時には私達の至らぬところに対してご指導を頂くこともありました。そうしたこと含め、改めて始めから俯瞰してみると、自分も変わったものだと思わされます。それと共に、皆様お忙しいにも関わらず、私達のような学生のためにお時間を割いて話を聞いてくださった上でご協賛を決めてくださったり、時に他の方をご紹介下さったりと数々のご厚意に満ちた対応に大変感謝しています。社会人になってからでは滅多な事でない限りお会い出来ないような方々とお話をさせて頂いたり、数か月のうちに沢山の素敵な応接室に通して頂いたりと、数多くの貴重な経験をさせて頂きました。

会期中にも多くの学びがありました。何より大きかったのは、各国参加学生たちと「将来、それぞれ自国を代表する立場となって再会し、大きなことを共に成し遂げよう」という約束を交わしたことです。それまで曖昧だった将来の夢、明確に言葉に表す事が出来ていなかった国際交流をしたいと思う理由、こうしたものが彼らと過ごした濃密な1週間の中で明らかになったと感じています。それこそ各国のトップ大学の中でも優秀とされる参加者の意識は非常に高く、フォーラム中の何かを学ぼうとする姿勢、少しでも交流を深めてこれから繋がる関係を築こうとする姿勢、そしてどんな環境にでもすぐに順応するところを目の当たりにし、今まで多くの時間と労力をかけてこのフォーラムを実現させて良かったと心から思う事が出来ました。それと同時に、彼らが時に口にする「これからは私達が国を引っ張っていくのだ」という言葉には強い説得力があり、真のグローバルリーダーたるやどうあるべきかというものを同世代ながら学ばせてもらったと感じています。実際、今後日本と中東・アフリカ各国の関わりは一層重要なものになるでしょうし、ビジネスに関して海外に支店がありさえすれば「グローバル」と呼ばれるような時代から人材や組織体質までもがボーダレスになって初めて「グローバル化」と呼ばれる時代が変わる中で、学生時代から交友関係にある友人が世界各国（特に、これから更に国家間の親交が深まると考えられる国）にいることは素晴らしいことだと思います。

会期終了後の今も、運営・国内外参加者はSkypeやFacebookを通して定期的にやり取りを続けています。これからもこうした関係性を続ける中で「将来、それぞれ自国を代表する立場となって再会し、大きなことを共に成し遂げる」という約束を忘れずにいたいと思います。私は正に今、大学3年生で就職活動の時期を迎えています。まずは約束に1歩近づくため、将来を考える中でこの夏のことを振り返り、本当に彼らと一緒に仕事出来る日を夢見て毎日を過ごしていけたらと考えています。そしてまた、この1年で得た経験・最高の仲間を一生大切にしていきたいと心から思っています。

堀江友美子

私がグローバル・ネクストリーダーズフォーラムに入ったのは、2010年の夏だった。当時、以前から所属していたサークルも代替わりが近づいて時間に余裕ができており、学生時代に何かやり遂げたと思えるものが欲しいと思っていたため、何か新しい活動を始めようと思っていた。高校のとき海外に住み、そこで非常に大きなカルチャーショックを受けて、自分の価値観が根本的に変わる経験をしていたため、2年ぶりに新しい価値観に出会いたいとも思っていた。そんなとき、この団体のメンバー募集のポスターを見て、運営として参加することにした。参加者ではなく、運営メンバーとして参加することとしたのは、自分が高校のときに受けたような衝撃を、日本の学生にも、そして日本人と会ったことがないような海外の学生にも体験してもらいたいと思ったからだった。

このような漠然とした目的で入ったが、その結果、一年間の活動を通してたくさんの経験ができ、いろいろなことを学ぶことができた。中でも、自分の中で強く印象に残ったことが3つある。

一つは、一年間の準備を通して常に意識することとなった、責任感である。私は国内渉外という役職上、さまざまな企業や団体の方にご協力をお願いすることが多く、そうした交渉の場での自分の言葉に責任を持つことの大切さと難しさを学んだ。学内のサークルでは、自分が何か間違ったことを言ったとしても、迷惑がかかるのは友人など狭い範囲の人たちである。しかし、今回のフォーラムの失敗は、お忙しい中お話を聞いてくださり、また支援をしてくださったすべての方に迷惑をかけることとなる。時がたつにつれ、国内渉外チームを率いる身として、応援してくださっている方の期待に応えたいという思いが強くなっていった。国内渉外はもっとも早くから活動を開始した部局であり、前例も予算もない状態で、初めて開催するフォーラムにたいしての支援をお願いすることは非常に難しかった。アポイントをとった方すべてが快く応援してくださるわけではなく、応援してくださっているからこそ、厳しい言葉をいただいたこともあった。特に春ごろには震災の影響もあり、渉外活動が思ったように進められず、非常に苦しい思いをした。なかでも、「アフリカに行けば、食べ物を送って目の前の貧困を助けるほうが先だと思うだろう」という指摘は、アフリカに行ったことのない自分にとっては、当たり前だが痛い言葉だった。こういった指摘を随時受けながら、自分たちは、自分は、何がしたいのか、これをやることで何か意味はあるのかを常に考え、悩み続けた。責任を持つということは、自分の中であやふやな部分がある状態ではできないことを知った。一方で、そうした状況で少しでも私たち

の活動を認めてくださる方がいらっしゃり、そうした方から激励の言葉をもらったときは本当に涙がでそうだった。運営メンバーの人数が少なかったため、仕事の量は非常に多かったが、支援してくださっている方、そしてできると信じて仕事を割り振ってくれたり、引き受けてくれたりする仲間がいたからこそ、自分の仕事に責任を持つことの大切さに気付くことができたと思う。責任を意識するということは仕事に限らず人間関係を築くにあたってとても重要なことだ。一年間の準備にあたって、この責任感というものの重要性に気づき、またそれに基づく覚悟を決めてやっていれば、それを認めて信頼してくれる人がいるということ、身を持って体験できたことは、私を人間として成長させてくれた。

私が学んだことの二つ目は、やはり文化の差である。特にイスラム圏の学生は、文化の違いが大きく、ちょっとしたことで大問題に発展することが多かった。食事やお風呂など、日本人同士の合宿であれば何の問題にもなりえないところが、できる限りの準備をしても問題に発展してしまうことがあった。また、ちょっとしたところで社会状況の違いからくる差も見ることができた。海外学生から、食べかけのパンを捨てずに置いておいたほうがいいかと聞かれたときは、何を言っているのかと思ったが、南アフリカではそれが清掃員にありがたがられるという。また、日本の失業率を聞いたときの彼らの反応も異常なほど大きかった。海外学生は日本から学ぶものがたくさんあると言っていた。一方で、私たち日本人の学生も、彼らの積極性や、各国の社会の中で彼らがおかれている状況というものを垣間見ることができた。日本と今回訪日した学生の国々では、いまだに社会情勢や経済状況、文化や宗教といった面で様々な差があることが再認識でき、それは私たちが普段よく接する欧米との差より大きいことも感じることができた。

しかし、三つ目に学んだことは、以上のような文化差があっても信頼関係が築けるということである。今回渉外をしていたとき、「グローバルということの意味をどう考えるか」と問われて答えに窮したことがある。そのとき私は「文化の差があることは当たり前であり、それを全面に押し出して意見をぶつけてしまうと衝突してしまう」と考えていた。それは私の高校時代の体験から導き出された考えだった。ここから私は、グローバルであるということは、互いの差を認めて、違うところは相手に意見を押し付けないことだと考えていた。今でもそれはある程度変わっていない。しかし、今回フォーラムの1週間の間に、途中で運営を含めた参加者全員の態度に明らかに変化があったように思う。最初、私たちは海外の学生が滞在に満足してくれるか、意味のあるフォーラムを一緒に作り上げることができるかを不安に思っている部分が多々あった。一方で、海外参加者もお風呂などの慣

れない文化にとまどっている様子が手に取るようにわかった。しかし、一緒に生活する時間が長くなるなかで、運営メンバーは参加者を信頼して指示をだすことができるようになり、また海外学生を含めた参加者もそれに応えて私たちを信頼して、協力してくれることが多くなった。運営の忙しさを見かねてか、積極的に手伝ってくれたり、心配してくれたりするようになったことも信頼関係の醸成につながったと思う。こうした関係を作るということは、私がこのフォーラムに携わった目的の重要な部分を占めており、海外学生から心をこめて言われた「We've learned from you guys a lot!」という感謝の言葉は、一年間準備してきてよかったと思わせてくれた。この1週間の経験を通して、私は「グローバルであること」とは、文化の差を認め、それでもできる限りわかりあえる部分を見つけて信頼することによって、全体の信頼関係が生まれるという連鎖を意識的に行えるということではないかと思うようになった。人は自分には理解できない考え方を持つ人がいると、その差ばかりが目についてしまって、積極的に信頼を見せることができなくなってしまうことが多々あるように思う。そうした場面で自ら相手を信頼する勇気をもつことが、結果的に相手からの信頼を勝ち得て、お互い歩み寄るという成功を呼ぶのではないだろうか。

1週間のフォーラムの準備のためにかけた一年間は決して短いものではなかったし、そのあとに来た1週間のフォーラムも密度の非常に濃いものとなった。それらの長い期間を通じて、以上のように私は責任感・文化差・文化差を認めたいという三つを学ぶことができた。何より、運営の仲間や参加してくれた先生や学生の笑顔と、「ありがとう」という言葉、そしてそこに現れている信頼の表情は、最後までこのフォーラムを作りあげるメンバーでよかったと思うのに十二分であった。フェアウェルパーティーのあいさつで言いたいことはたくさんあるのに感謝しか出てこなくなり、大学入学以来初めて強い達成感から泣いてしまった。これだけ大きなプロジェクトを達成するうえで応援して下さった方や参加してくれた学生には心より感謝したい。

それと同時に、こうして得た信頼関係やアカデミックな知識は、フォーラムの終わりとともに消え去るようなものであってはならないことを私は強く自覚している。今回のフォーラムの目的は、世界の国々と日本が、どういった点で協力できるかを学生が考えるプラットフォームを作ることであり、今回一回でフォーラムが終わってしまったは何の意味もない。自分がこのフォーラムに携わった目的、そしてこうした理念に賛同して下さった方々への責任を果たすためにも、来年、再来年とつないでいくまでが自分たちの仕事であり、そのためのサポートをしっかりとっていくことが大切だと思う。また、今回はあくまで教育

レベルが高い学生を相手にしていたため、各国の学生と交流をしたといってもその情報が偏っていることも自覚している。偏りのないアフリカや中東を見るには、現地に行くことが一番である。個人としては、来年、在学中にぜひアフリカに行き、生のアフリカを見ることで、今回得た自分の知識を別の角度から見られるようにすることで将来のステップにしていきたい。

松本奈純

私は 2011 年度 GNLF で中東・北アフリカ部会及びパートナーシップ委員会の部局長を務め、海外大学等の機関と参加者との連絡、訪日に向けた手続き等を担当した。2011 東京国際大会での 1 週間はもちろん、1 年を超える準備期間を通して、私は「運営」や「チームワーク」について学ぶことが多くあったし、長期の米国滞在経験で培った英語力を活かし、向上させる事も出来た。それらの能力は社会人としても欠かせないと感じる一方で、私が得た最も重要なものは『自分で新たに道を作る』力と、それに繋がった自分の弱さの克服であり、1 年前よりも成長出来た事に対する喜びである。

大学 2 年生の夏、Global Next Leaders Forum に携わる事を決めた理由は、どちらかという先述した能力を求めての事だった。「アフリカ」（非常に抽象的かつ曖昧）に以前から関心はあったものの、日々の生活は大学の授業やアルバイト等で精一杯で、なかなか自主的に本を読んだり調べたりする事も出来ていなかったのも、学ばざるを得ない立場に自分を追い込みたかった事もある。当初の私は、本団体が掲げる Global Knowledge, Experience, and Human Network が『グローバル・リーダー』に不可欠と理解しつつも、自らがそれに成る事に関してさほど積極的ではなかった。

「石橋を叩いても渡らない。」私の性格について、母はこれまで幾度かそう表現してきた。「リーダー」という肩書きはこれまでの学生生活でも担う経験はあったが、基本的には失敗する事を恐れ、自分ではなく他者が求める「正しい」答えを探す傾向が強かった。まとめる力はあっても、引っ張る力が弱かった。自分は決断する事が苦手だという認識は幼い頃からあったが、その迷いは責任を取ることを避けたいという自分の弱さであったと何時からか思うようになった。一人暮らしの大学生活で、自分で決断する事が増えるにつれて、その自分の弱さをより強く意識するようになった。意識しつつも、「間違ってしまったらどうしよう。」という不安を感じると思考停止に陥り、すぐ他者に助言を求めた。

例えば、GNLF に参加して一番始めに私がした事が団体の口座開設であったが、それだけで森下に何通もメールで指示を仰いだ覚えがある。今考えれば、後に変更可能な事柄や、冷静に考えれば必要か否か判断可能なサービス等についても、考え無しで全て会頭の森下

にメールで聞いた。「間違える事」を過剰に恐れていた私は、タスクを「任される」事と「頼まれる（代理）」を区別出来ておらず、「解決を見出せば良い」というプラス思考に至るまでには時間が掛かったし、多くの課題や問題にぶつかった。反省しつつも問題が生じた事自体を悲観せず、「どうしたら良いのか」を直ぐ考える様になったのが何時からかは分からない。だが、可能性が少しでも感じられたら当たってみる、試すという事を躊躇なく出来るようになっていった。来日出来なくなったある国の参加学生の代わりに、学部生かつ英語が話せる留学生を急きよ応募する必要があった際、可能性がある都内大学の事務所に連絡し、留学生会の責任者から学生を推薦していただく事も出来た。

学業との両立に苦戦しつつも、1年間諦めずに最後までやり遂げた経験は、今後も私に自信と勇気を与えてくれるし、私を確実に成長させてくれた。先日、久しぶりに再会した友人に「(前より) 生き生きしている」と言われた事がとても嬉しかった。そして、当初目的としていたアフリカ諸国に関する知識や友人(人的ネットワーク)も得ることが出来たし、抽象的だった「アフリカ」をより現実的で、自分と繋がった存在として捉えている。私はまだアフリカ大陸に行ったことが無いが、近いうちに参加学生を訪問させてもらう事になっている。

最後に、Global で在ることとは、(名詞 globe の通り) 地球規模で物事を捉え、与えられた環境(=地球=ステージ)を最大限に活用するという事だと思う。しかし同時に、universal (普遍的) が単一的なイメージであるのに対し、global な人というのは自国や自文化を軸として大切にすることが不可欠だと感じる。自国の強みや特徴が主張され、差が認識出来て初めて、お互いを補いあう事(つまり協力)が可能となると思った。その意味でも、私は日本という国と文化を学ぶ必要性を以前より強く感じている。

常に支えてくれた GNLFF メンバーと当団体をあらゆる面で支えてくださった社会人の方々に、私は育てていただいたと感じている。中でも、チュニジア御駐在の八幡暁彦様(コーディネーター、筑波大学国際部海外大学共同利用事務所: BUTUJ)には個人的に大変お世話になった。マグレブ地域の大学及び招へい手続き等でご支援頂き、現役のグローバル・リーダーとして、国際交流について多くを学ばせて頂いた。最後となったが、GNLFF という新たな試みを見守ってくださった皆様に、この場を借りて心から感謝の意を述べたい。

山崎悠人

僕が GNLFF の運営に加わって以来、本会議が終了するまで、ずっと考えていたことがある。そして本会議が終了し、この一年間を振り返るエッセイを書く段階に至り、ついにその想いを言葉にしなければならない時が来たのだと感じている。一年間フォーラムを準備

する間、僕の頭につきまとして離れないその悩ましい想いは、「本当に自分はこのフォーラムに参加する資格があるのか」というものだ。

本会議が終了した今は、何を今更という感じがするかもしれない。しかし、僕にとっては、運営としてのモチベーションに関わる決定的な問題であった。物心ついてから、GNLFに運営として加わるまでの、自分の人生約10年間を振り返ってみると、このフォーラムが表題として掲げるグローバルリーダーとは程遠いものであった。小学校・中学校・高校と、人並みに楽しい生活を送ることができた。しかし、ただ「勉強」ができるだけで、与えられた問題用紙の上に、適切な答えを書いていく事以外、目立ったこともなかった。スポーツや文化活動等で特筆した実績を残す事もなく、クラスの中心としてまとめ役になることもなく、国際交流といったイベントとも無縁であった。しかし「勉強」により、東京大学に進学することができた。そして大学に進学すると、自分を遥かに上回る、驚くべき多彩な能力を持つ学生が、数えきれないぐらいいた。また、「東大までの人・東大からの人」といった標語に代表される、社会で活躍するには東大に入ってから何をすることが重要だという言説が、周りにあふれた。僕は成り行きから旅行サークルに入会し、同学年の学生の中で、ただ時間を持て余していそうという理由で、サークルの会長に就任することになった。そうして2年生の12月まで会長を務めた。これといって重荷となる仕事もなく、特に優れた実績も残す事もなく、漠然と次の代へと引き継ぎ、会長の職務を終えた。会長という責任のあるはずの立場に就く事で、何を得たかと思いきや、あまり何かを得たとは感じられなかった。そうした状況の中で、僕自身、大学に入学してから一体何を成し遂げてきたのか。そして何より痛感したことが、「自分から東大生という肩書きを消し去ったとき、果たして何が後に残るのか」ということだ。何も残らないのではないかと、肩書きを隠したとき、自分はどの程度の人間だと思われるのか？ 人知れず頭を抱えていた。

そこへ、大学に入学して以来同じクラスの友人として親しくしていた会頭の森下から、「フォーラムの運営に加わらないか」という声がかかった。僕は、「うん、やる」といった二つ返事で引き受けてしまった。まるで、自分探しの旅に出た青年が、宛もなくさまよったあげく、偶然に未知の刺激に満ちた街にたどり着いたかのように、である。

GNLFの運営に加われれば、自分の中で何かが変わるのだろうかという漠然とした思いだけで、運営メンバーとなった。しかし、フォーラムの表題である、グローバル・ネクストリーダーズフォーラムというネームは、当時の僕の手には大きすぎるものだった。掲げられ

ている理念は高尚で、計画されているフォーラムは壮大であった。フォーラムの成功に立ちだかった壁は数えきれないくらい多く、先の見通しが立たないほどに分厚かった。メンバーは皆優秀で、その大きな壁を前に、一步一步苦戦を強いられながらも着実に進んでいった。僕はその壁の前でただ金縛りに遭ったように身動きがとれず、大きな働きもできないでいた。何よりも、何としてでもこのフォーラムを成功させ、世界で活躍するリーダーになるための一步を踏み出すのだというモチベーションに欠けていた。そんな自分に、GNLFで運営としてやっていく資格があるのだろうか。自分自身に問い続けていた。

そうして運営に加わりながらも、仲間に迷惑を掛けながら漫然と過ごしているうちに、3年生になった。フォーラムまで6ヶ月を切った。この時期になると、僕の心境は変化しつつあり、以前よりも自らのやるべき事に責任を感じ、積極的に動き出していた。様々な理由があるが、今思えば、大きな理由は2つある。

一つは、宛もない自分探しでは、決して旅人は救われれないということに気がついたこと。本当の自分は、どこかに転がっていたり、偶然に拾い上げたり、偶然に与えられるものではないということだ。大学で勉強を続けているうちに、現在の若者はそうした歪んだ「自分探し論」に陥りがちだということを知らされた。それは、ただフォーラムの運営となる機会が「偶然」に与えられ、それに甘えていた自分の姿と重なるものであった。ようやく、このままではフォーラムに参加しても何も変わらないということに気づき始め、自ら壁の前に仁王立ちをし、積極的に立ち向かっていかなければならないと感ずることとなった。

二つ目は、仲間との親睦が深まることで、共同体的な責任に基づくモチベーションを感じるようになったということ。ミーティングや合宿を通して、運営のメンバーとは仲良くなっていった。すると、自らに課された作業の進み具合が、他のメンバーの進捗に影響を与えるということを強く実感するようになる。自分が、自らの作業をしっかりとこなさないと、仲間に取り返しのつかない迷惑をかけてしまう。こうした意識が次第に芽生えていった。今まで、チームとして大きなプロジェクトに携わった経験がなかったので、あらゆる作業が新鮮であり、自分の力が少しでもチームに役だっているという感覚に、大きな充実感を感じ始めていた。

こうして、フォーラムの実現に向けて、仲間に助けられながらも、何とか自らの作業をこなしていった。月日はあっという間に過ぎていき、気がつけば夏休み、本会議まで残り一ヶ月となっていた。大学の授業では夏休みにたくさんの課題が課され、それらを連日消化していく必要があった。そして、本会議まで一ヶ月前ということで、ラストスパートと

して、膨大な量の作業が降りかかった。夏休みであるのに、課題にしても、本会議に向けた作業にしても、一日中パソコンに向かっていた。そうした日々が続いていくうちに、自分が一体何のために時間を費やしているのか、わからなくなる時があった。すべてを投げ出したいと何度も思い、やるべきことを放り出して遊んでしまった日もあった。しかし、何もかも投げ出すには既に遅く、9月に入ると大学の課題も無くなったので、ひたすら作業を続けた。ただ、チームの一員として、フォーラム開催の妨げになってはいけないという思いと、何も成長しなかったという終わりだけは嫌だという思いが、それを支えていた。

運営メンバーの誰もがそう感じていたと思うが、本会議開始当日は不安でいっぱいだった。運営として、行程をうまく管理できるのだろうか、お金は足りるのだろうか、海外学生とうまくコミュニケーションが取れるのだろうか、数え上げればきりがない。本会議中は、様々な想定外のハプニングなどがあったが、詳しい行程はここでは書くことはできない。しかし、22日のディスカッションが終わるまで、辛い日々が続いた。まず、運営ミーティングが深夜まで行われた。遅くまでミーティングで時間を取られ、参加学生とコミュニケーションをとる時間が無かった。そしてもう一点、自らの能力の問題があった。もう少し英語力があればと思うことが何度もあった。出来る出来ないではなく、やろうとすることがどうか問題だとはいえ、気概だけで解決することはできないのも確かだ。こうした理由から、本会議が始まってしばらくは、先に述べたような2つの問題に再び悩まされることとなった。自分は本当にこのフォーラムに参加する資格があったのか。フォーラムが終わり、自信を持って成し遂げた、成長したということが出来るのか。

22日の行程が終わると、運営としての仕事は概ね終了し、参加学生と交流できる時間が増えた。夜、観光、そしてパーティ。多少問題はあれど、スムーズに行程を進めることができた。23日の夜には、帰りたくないという海外学生の声も聞こえた。そうした様子を見て、僕は気がつくことになった。全てはうまくいっているのではないか。時間ができて、参加学生との交流もできた。全ての行程も順調にこなせた。参加学生は、海外学生も含めてみんなフォーラムに満足している。フォーラムは成功だった。クロージング・パーティで、参加学生のスピーチを聞き、運営の仲間のスピーチを聞き、海外からお招きした教授のスピーチを聞き、誰もが楽しそうな、時には涙を浮かべた表情を見て、フォーラムの成功を確信した。終わってみれば7日間はあっという間だった。そして、楽しいことがあった時に感じるそのありきたりの感覚が、今回ばかりは、かけがえのない価値を持つものと思えた。一年間近く準備をし、本会議中ですら企画の準備に追われていた。そうした苦労

と葛藤の全てが、喜びと充実に変化し、本会議後半たったの数日間に凝縮された。このような経験は人生で初めてで、本会議終了後の帰路、放心状態であった。

本会議が終わりしばらくし、自らの気持ちに整理をつけた。結局、GNLFとは僕にとってどのようなものであったのか。本会議の成功は、僕に何をもたらしたのか。GNLFは、グローバル・ネクストリーダーズフォーラム。将来、世界的なリーダーとして活躍する人材を育成することが本来の目標だ。一方、運営として参加した僕は、参加前、そうした人間とは程遠い存在であった。常にフォーラム参加の資格を疑っていた。その疑念の中で、仲間助けられ、何とかやるべきことをやり、フォーラムの行程も無事に終わることができた。参加者は、リーダーとして世界で活躍できることが保証されているのだろうか？ もちろん、そんなはずはない。僕自身、フォーラムを終えて、世界のリーダーになるための能力と人脈が、7日間で身についたわけでは、全くない。では、充実したフォーラムの経験を味わっただけで、何も成長しなかったのか？ それもまた違う、と断言することができる。7日間過ごした空間は、フォーラムという閉ざされた空間であった。しかし、日常生活では決して体験することのできない国際的な多様性、一生に残る貴重な体験、刺激に満ちていた。閉ざされていながらも、無限の可能性に開かれていた空間だった。この体験を一年近くかけて企画し、実際に味わったのだ。そうした体験を経て、改めて日常を見回すと、世界が少しだけ、変わって見えた。もちろん、グローバルな多様性を実際に経験して、国際的な視点が身についた。そして、資源や国際問題について、知識と興味を深めることができた。しかし、それだけではない。何しろ、世界の見え方が少しだけ変わったのだから。

まず、日常に存在する多種多様な営みの、その背後に存在する人々の力を見通すことができるようになった。どのような営みにも、それを支える人々はたくさんいて、誰もが一生懸命に動いている。そんな当たり前のことが、実際に大きなプロジェクトを運営することによって、大きな価値を持つことのように感じられた。

次に、今まで自分には程遠い世界の営みだと思われていたことが、少しだけ身近に感じられるようになった。初めて一人で渉外に赴き、団体へのご協力をいただくことができた時のことを思い出す。そして、優秀な仲間が様々な困難を乗り越え、時には協力して、分厚い壁を一枚一枚突破していったことを思い出す。そうしたことを、ある時は自分自身が経験し、ある時は経験を共有することで、肌で感じるようになっていった。今までは星空のように遠くにあったものが、手を伸ばせばもしかしたら届くかもしれない位置に降りてきたかのように感じられた。

最後に、フォーラムを終えて、かつて会長を務めた旅行サークルに始めて足を踏み入れ

た時の気持ちを書きたい。冒頭で述べたように、自分は乗り気ではない会長として、サークルに有意義なことは何もできなかった。しかし、自分で驚くべきことに、もう一度会長をやることができたらどうなるかと考えてしまった。当時はあれほど嫌がっていたのに、サークルの様子を見て、自分がもう一度会長になったなら、このサークルをどのように変えることができるのか、考えてしまった。そして、もう一度やってみたいと思ってしまった。実際にもう一度やることはできない。だから、改めてこのように思う。この至高の体験を、せめてもう一年早く味わうことができたらと。そうしたら、その一年間で、大学生活がもう少し、あと少し、実りの大きなものとなるのではないかと。

先ほども述べたように、本会議を終えたからといって、グローバル・リーダーとなるための能力が直ちに身についたわけではない。しかし、日常を見る視点が変わったと感ずることから明らかなように、将来に向けて自分が変わっていくことに、良い影響を与えたことは確実だ。そう、GNLFは、グローバル・ネクストリーダーを即時的に生み出すためのドーピングではない。来る将来へ向けて、個人へ確実な好意的変化をもたらす、肥料なのだ。それはグローバルな知見・経験・人脈という理念からもわかるように、時間とともに育ち、一生ともにあり続けるものだ。リーダーとは縁のなかった人間。国際的な経験とは縁のなかった人間が、偶然たどり着いた経験。しかし、偶然から始まった運営学生として、生涯の仲間とともに、苦勞を重ね、大きなプロジェクトを成功させた。それはかけがえのない経験であり、一生の経験だ。その過程で、至らなかつたことは数えきれず、そのせいで仲間迷惑をかけたことも数え切れない。しかし、運営の一員として、何とか成功に携わることができた。そして、成長の種を実感できた。今、冒頭の問いかけに改めて戻してみる。自分はフォーラムに参加する資格があつたのか。おそらく、自分よりもGNLFで立派な働きを行うことができる代役はいくらでもいるだろう。しかし、これを自分自身の物語として考えた時、それは間違いなく、成功の物語だ。そしてそれが成功の物語である以上、GNLFは僕を認めてくれるのではないだろうか。何故なら、公募学生・海外学生も含め、すべての参加学生が、それぞれのGNLFの物語を持っており、それらは葛藤や苦惱を抱えながらも、同じ成功の経験を共有しているからだ。

松浦大記

東京大会の会期が終了した9月24日の夕方、私は一人成田空港に向かつていました。ケニアとタンザニアからの参加者の帰国を見送るためです。都心で観光をするブルガリアと南アフリカの参加者にぎりぎりまで同行しており、先に空港に着いていた、ケニアとタン

ザニアのグループを追いかけていたのです。

列車の中で、一人涙を流しそうになっていました。参加者との別れを惜しむと同時に、この一年間を振り返っていました。それまで忙しくて実感できずにいた、この大きなプロジェクトの終わりが、いよいよ近づいていることに気づきました。長い夢から覚めたような感じがしていました。

私が GNLF に参加し始めたのは、一年前、大学二年の夏でした。大学入学後に西アフリカを訪れて以来アフリカ諸国に関心を強めており、各国の学生と意見の交換をしたいと考えていたからです。

春には、サブサハラアフリカ及び米州・欧州の各国大使館・大学との折衝という重要な役割を与えられ、本格的に活動を始めました。正直なところ英語が得意なわけではなく、また、英語はおろか日本語においても社会人の方々との折衝経験はありませんでした。そのため重要な仕事を任されることに不安を感じていました。しかし、今振り返ると、飛び込んでみてよかったと考えています。この半年間、かけがえの無い体験を得ることができたからです。

国際フォーラム開催の準備をするにあたって、私が行った仕事は、各国大使館を通じて各国のトップ大学への協力を要請、教授と参加者を決定するというものでした。参加者が決まり次第、参加者の日本への渡航と日本での滞在に関わるあらゆるサポート——航空券・宿の手配、ビザ申請——を行いました。

あらゆるステップにおいて、英語の書類作成や、英語での折衝には苦労しました。最初は、わからないことだらけでメール一通を書くだけでも時間がかかっていました。しかし、メンバーに助けをもらったり、時には大使館員の方々にアドバイスをいただきながら、何とかやり遂げることができました。

このフォーラムは、各国の皆様のご協力が無ければ成し遂げることはできませんでした。各国大使・外交官の皆様には、全面的なご協力をいただき本当にありがとうございました。各国の大学と私たち正直なところ、学生相手にこれほどまで親切に対応していただけたとは考えていませんでした。皆様のご協力が無ければ、各国のフォーラム参加はありえませんでした。

各国トップ大学のコーディネーターの皆様においては、調整を行っていただき本当にありがとうございました。メールでのやりとりは、顔が見えない中で私の拙い英語に困惑したこともあるだろうと思います。ですが、いつも根気強くそして丁寧に連絡を取り続けてい

いただきました。

そしてなによりも、主催が学生だけの団体——しかも、国際会議の開催経験は無い——であるにも関わらず、このフォーラムに参加していただいた各国教授の皆様と参加学生の皆に深く感謝しています。日本を訪れるにあたって不安を感じていたことと思います。また、会議開催中の運営上のトラブルに対しても耐えていただき、そして運営にご協力していただきました。

多くの方々のご協力をいただいて会議をなんとか成功に終わることができて、とても嬉しく思っています。

会議が終わった直後、1週間の会議がまるで夢だったかのように感じていました。しかし今では、夢ではなかったと実感しています。遠くの国の学生たちと今でも連絡を取り合っているからです。また、多くの学生が Facebook を通じて連絡を取り合っているのを、毎日見ることができます。各国の各国でこれからの社会を作っていくであろう次世代のリーダーたちの、グローバルなネットワークを作ることができたと言えるのではないのでしょうか。多くの学生が、文化の異なる学生と協力してひとつの国際会議を作り上げた思い出を忘れず、このネットワークへの帰属意識と連帯感を今でも持ち続けていてくれることに、「メンバーシップ」委員会の成果として何よりも達成感を感じています。

田淵寛次郎

1年間を振り返ってということで、率直に、本当に率直に1年間の思いを綴っていく。幸いにも他のメンバーは優れた文書きが多いので、私は安心して拙文を連ねようと思う。この文を読まれる方にとっては読みぐるしい点が多々ありご迷惑をおかけするかと思うが、ご了承いただきたい。

私が GNLF に加入する契機となったのは、丁度1年前の2010年12月頃であったろうか、既に GNLF に加入していた今岡にこの団体の話を聞いたことがきっかけだった。その直前、私は自分が生活する自治寮の代表となった。その際代表をやっていた先輩が同様に国際関係のインカレの学生団体に所属していたという話を聞き、大学外のサークル活動に興味が湧くようになっていた。そのような時に今岡に聞いたのがここ、GNLF だった。正直、今思うとこの出会いはまさに偶然であったとしか言いようがない。大学外の、それも国際関係の学生団体に興味を持っていなければ、自治寮の代表になり「リーダー」というものに興味を持っていなければ、今岡と出会っていなければ、私は GNLF に会うことなく、ましてや大学外の世界にも全く触れる事無く4年間を終えていたかもしれない。今岡からこの

話を聞いた時、私は即座にこの団体に入ることを決めていた。よくよく考えれば他にも国際関係を扱う学生団体はいくらでもあるし、リーダー育成のためのインカレサークルは山ほどある。人生はタイミングが重要とは言うが、まさにその時、タイミングが来たと直感したのである。すぐに、私はGNLFに加入することとなった。

GNLFに加入し、私は非常に多くの価値観を壊された。自分に出来ることを如何に低く見積もっていたのかを肌で思い知らされた。「世界十数か国の学生と教授を呼び、1週間共同生活をしてゆく中で共に講師のレクチャーを受け、ディスカッションをし、知見・経験・人脈を深めていく」という内容は勿論承知していたものの、それを実現するために動かすヒト・モノ・カネの規模の大きさをたや。田舎から上京してきたばかりの19歳の少年だった私にとっては絵空事であるようなことを当然のように行っていったことで、「社会は自分の力で変えることが出来る」と私は確信できるようになった。

とはいえGNLFに加入した直後、私は不安に襲われていた。「入ったは良いが、自分はこの組織に貢献できることが出来るのか？」という不安である。周りは殆ど東大、そして年上という状況下で私は卑屈にもなりかけていた。しかし、先輩方は学校も学年も全く意識せず、普段の話題にも出さず、私にタスクを振りアドバイスもしてくださった。人によっては配慮がないと思われるに違いない程、新人である私に思い切ってタスクを任せてくれた先輩方には感謝してもしきれない。そのようにして私は先輩方に「自分で問題について考え、解決してゆく力」を早くから育てていただいた。

加えて、何より自分にとっての支えとなってくれたのが同学年・同大学のメンバーの一人である今岡の存在である。彼は私より先にこの団体に加入しており、私をGNLFに導いてくれた人間である。元々彼とは大学では授業が一緒の縁でちょくちょく話していた程度に過ぎず、GNLFに加入するまでは特別仲が良いというわけでは無かった、むしろ私は彼に余り良い心証を抱いてはいなかった。しかし、彼はどんな状況にあっても常に威風堂々とし、仲間内から一目置かれている存在であった。上手く表現は出来ないが、彼は「何かよきは分からないけどアイツについていけば面白いことが起きそうぞ」と感じさせる男だったのである。そのおぼろげな印象はGNLFで共に活動していく中で次第にはっきりとした輪郭を帯びていく。彼はGNLFの中にあっても一切の不安や恐れ、卑屈さを出さず、常に団体の主導的な地位にあってメンバーを引っ張っていった。そんな彼の姿を見て、私は彼に負けまいと努力し、(恐らく)彼も私に恥ずかしい姿は見せまいと努力し、互いに切磋琢磨していくことが出来た。繋がりが希薄になりがちな大学生活において、生涯の友、互いに高めあえるライバルと呼べる存在に出会うのは難しい。ご飯を食べに行く友達なら、酒を飲みに行く友達なら、遊びに行く友達なら幾らでもいる。しかし夢を語り合えるような、

本気の自分を見せられるような友人と巡り合うことは得難いことだ。GNLF 本会議という非常に困難なイベントの開催を通じてそのような生涯の友と呼べる友人を得ることができたことに、本当に感謝したい。

GNLF での1年間を通して、私は「自分で考え、解決する力」「社会は自分の手で変えていけるという確信」そして「生涯の友」を得ることが出来た。これでめでたしめでたし。と言いたいところであるが、今の私が考えなければならないことは来年、GNLF2012 である。私は来年度は会頭として組織を引っ張っていく立場となる。頼りにしていた先輩方も、支えとなっていた同輩ももういない。しかし、今の自分は昨年度までの自分ではない。先輩方・同輩の友人から受け継いだ思い、培ってきた財産が今の自分にはある。素晴らしい後輩たちや、新しく入る仲間たちもいる。様々な思い、責任を全て受け止めて、必ず来年も成功させたい。そして、充実した気持ちで再びこのエッセイを書けることを心待ちにして、本年度のエッセイの筆を置きたいと思う。

今岡 征

木々の葉も色づく10月、怒涛のような日々を回顧する。自分を成長させた、そして人とのつながりを感じた日々であった。当時の私といえば、度重なる課題に苦しみ、自分の能力のなさに絶望し、幾度となく意欲を失うことがあったが、今振り返れば、全てが良い経験であった。本稿では、そのような刺激的な生活の一部を思い出し、この1年間を通し、多くのものを得るに至った軌跡を辿ってみたい。

Global Next Leaders Forum(以下、GNLF と表記)は、世界で活躍する次世代リーダーの育成を目指す学生団体である。グローバルな知見、経験、人脈という標語を掲げ、中長期的に、世界における日本のプレゼンスを高めることを大きな理念としている。昨今のわが国に目を向けると、不況や少子化、環境問題、エネルギー問題等、多くの問題が提示されているにも関わらず、いずれも未だ明確な解決を見るには至っていない。そして、そのような状況の中、いかに日本という国の地位を、変化する世界において確保していくか。1つの解決へのアプローチとして提示されるのが、「国家と国家との関係も、まず人と人との関係から」という我が団体の謳う理念である。私は、このような団体の理念、あるいは、代表の熱意に魅力を感じ、GNLF のメンバーとなることを決意した。

実質的な活動としては、2011年5月には、各国の大使を招いたシンポジウムで司会を務めた。そして、それからというもの、9月の本会議のための準備に時間を割いた。新入生の歓迎、プログラムの決定、講師方の招聘など、私のGNLF での活動範囲は多岐にわたった。準備期間中、企業に協賛を頂いたり、各国から学生・教授を招いたりする先輩

を見て、日々刺激を受けていた。計画を綿密に立て、それに向かって大胆かつ丁寧に実行に移していく姿は、本当に勉強になった。GNLFメンバーは、仕事処理能力に長けている人が多いというのが実感である。

GNLF2011 本会議では、1つの印象的なエピソードがある。それは、海外、日本の学生がディスカッションをしている場に、運営メンバーが参加したり「バラバラ」な行動をしている時であった。本会議の後半ということもあり、メンバーには疲労の色も見え始め、ディスカッション全体の動きを総括している者はおらず、残り15分ほどでディスカッションにおいて俎上に上がった議論を踏まえた、ある種の提言をまとめる必要に迫られた。その時、1人の先輩が素早く数少ないメンバーを集め、ディスカッションでの議論を要約する者、日本語で原稿を書く者、それを英訳する者、そしてそれを壇上でスピーチする者、というように役割を振り分けた。各人はそれぞれに与えられた仕事を、死に物狂いで行った。その結果、1つのまとまった提言をすることができ、無事ディスカッションの閉めとなった。

このエピソードは、本会議のために、1年間ほど準備をしてきたことが、より良い形で反映された出来事であったと思う。当然ながら、このような状況になってしまったことを悔やむべきであるが、それをいかに解決するか、という点に注視してみる。限りある時間の中で、メンバー全体として、どのメンバーが、どの仕事を行うことが最もパフォーマンスを上げることはできるのか、ということ在即座に判断して、実行させるには、メンバー間で一定の信頼関係がないと実現できない。1年間で、メンバーの能力、長所を熟知し、それを瞬時に生かせるような、最も自分に適合する仕事をさせる、というのは、この1年間の準備期間でのメンバー同士の一体感が生んだ賜物であろう。

はじめは、政治的なインセンティブによってメンバーとなった私は、この本会議を終えて、無形の財産を得ることができた。1つ目に、私が出たものは、積極性である。有名大学ではない私は、正直、他のメンバーの大学名だけで圧倒されていた。しかし、他のメンバーが一度も、所属大学を理由に差別、不利益を課された、と感じたことも一切なく、私を温かく受け入れてくれた。そんなメンバーの助けもあり、私個人としての仕事も徐々に増え、GNLFメンバーの一員として仕事ができるようになる頃には、こんな自分でも同じように仕事ができるんだ、と嬉しく思ったこともあった。また、本会議では英語を日常として使っていたが、さほど自信のない英語で話すのは少し憚られる部分があった。しかし、意識的に、積極的に海外学生・教授と話すようになってからは、英語を話すことの恐怖心はおのずと消えていった。物事の表だけを見ていては、損をする。一步踏み出し、道を少しでも開けば、チャンスをどこにでも転がっている。そんな印象を受けた。

2つ目は、月並みではあるが、仲間の大切さ、人とのつながりである。1年間苦楽を共にしたGNLFメンバーには、多くの面で助けてもらった。気分が落ち込んでいる時は、優しく励ましてくれ、期限内に仕事を終わっていない時は、愛のあるお叱りを受けた。また、1人が挙げた成果をみんなで共有し、1人がどうしても助けがいるときは、みんなで分かち合った。本当に挙げればキリがないが、これからも付き合っていけたらいいなと思える人たちと会えたことは、一生の財産である。また、本会議中出会い、国外国内問わず、仲良くなった友も大切な財産である。この団体の理念である、人とのつながりが国家間同士のつながりを意識させるという標語を肌で感じ取ることができた。

学生生活の中で一番の思い出となる本会議を終え、相反する気持ちで過ごしていた。1年間の準備期間を経て、無事終了できたことに対する安堵感や達成感と、もう2度と同じメンバーで活動することはないという寂寥感である。一流と呼ばれる人は、利他的である、とよく聞いていたが本当にその通りだと思う。優秀な先輩、頼れる後輩、何でも言い合える同期に囲まれ、非常に充実した日々を送ることができた。これもすべて、代表である森下さんのおかげである。心より感謝を申し上げたい。また、この団体に関わって頂いた全ての人に感謝し、稿を閉じたいと思う。有難うございました。

照下真女

まだコートがいくくらい東京大学教養学部1号館は冷えきっていたことを思い出す。2011年4月、多くの新生でひしめき合う1号館2階の片隅にひっそりとGNLFの新歓ブースがあった。何が私の足をそこまで運ばせたのだろう。今でも鮮明に覚えているのは、ただ好奇心があっただけだということである。私も同様に1号館にて所属する他のサークルの新歓活動を行っていた。1年生で活動が終わり2年生となる今年は何をしよう、また新たなことをしてみようか。自分でもリクルート活動をする傍ら、新たな足場を求めていた。そんな時、GNLFの新規メンバー募集のチラシを本当に偶然手に入れた。正直怪しい団体かもしれないとも思った。聞いたこともない団体であったが、協賛・後援には名立たる企業名が数多く載っていたからである。どんな団体なのであろう。その好奇心が私をGNLFのブースに連れて行き、そしてそれがそのままGNLFに入るきっかけとなった。

だから私は確かな目的意識と動機をもってGNLFに入ったわけではない。もちろん説明を聞いて彼らの行おうとしているアフリカの学生との国際フォーラムは興味深いものであったし、理念にも非常に賛同できた。一つの目標に向かって彼らの一員となって活動を行っていくことは自分の生活に確かな道筋と目的を与え充実したものであった。しかし、GNLFという団体の理念を自分が共有し自分の理念として置き換えられていたかと考えた

時、それは違っていったように思う。渉外先に協賛をお願いしに回っている時も、団体の理念を口先だけなら簡単に説明することができる。しかし、それは説明している私自身の言葉ではなく、外から与えられた言葉である。学生団体として協賛を集めている以上見せる姿は真摯で情熱的なものでもあるが、それも自分の本当の姿ではなく、「こうあるべきである」というアイデアから似せて取って被せられた偽りの姿だった。ただの好奇心しか持たず、GNLFの団体という箱に乗っかることしかできていなかった。団体の一員として、その箱の中身を創り動かしていくことが求められていたのである。しかし、その箱の中身を見ることがせず、理念を自分の中に取り込むこともせず、ただ与えられた仕事のノルマを守ってこなしていくだけであった。

「何のために私はGNLFに入っているのだろう。何のために活動しているのだろう。」常に私の中にあつたこの問いかけは本会議が近づくにつれ大きくなっていった。他のメンバーが最後の正念場を迎えアクセルを目一杯踏み込もうとしている時、私は1人ブレーキをかけて立ち止まってしまった。このまま空っぽのまま進んでしまつたら、永遠に偽っていることになる。振り返れば中途半端な気持ちと思ひ入れで進んできた道が残っているだけであった。自分にできること、自分がGNLFという団体でできること、その位置、ポジションをもつことでGNLFの箱の中身として、原動力として私は存在できる。団体の理念を、目的意識を、自分の中に汲み込むには自分が中身となる以上方法はない。私という唯一無二の存在が、GNLFという唯一無二の団体でできること。それを探すことで必死だった。探せども、探せども答えは見つからない。しかれどもアクセルの利いたGNLFという団体はみんなを乗せて先へ先へと進んでいく。私の立ち止まった場所からどんどん離れていく。

そんな暗中模索する中、あるNPOから視察団の一員として印度派遣の推薦を受けた。派遣期間は9月14日から19日までの6日間で、派遣されることになればGNLFの本会議に最初から参加することはできなくなる。しかも直前の最も忙しい時期に抜けるとなれば他のメンバーにこれまで以上に迷惑をかけることになる。しかし私の将来の目標を考えた時、印度に行けるということはこの上ないチャンスであった。この機を逃したくないが、行くとなれば相当な迷惑がかかる。自分の気持ちを正直に代表に伝えた時、GNLFに中途半端に関わるなら脱退を求められるかもしれないと思った。しかし、代表から返ってきた答えは、印度に行ってから本会議の運営に携わってほしいというものであった。今あるチャンスを最大限に活かして、学んできたことをGNLFという場で還元してほしい。メールの文章からは代表のGNLFに対する思いがありありと伝わってきた。彼がどのように生き、どんな道を歩んできた上でGNLFという新たな物事にチャレンジしようとしているかがまさに伝わってきた。

その時、初めて GNLF の理念を自分の中に汲み入れることができ、GNLF という場で自分ができることが何であるかを見つけることができたのである。それぞれの場所で、自分が経験してきたこと、新しく発見したこと、自分というたった 1 人の存在が肌に触れ、目で見て、感じたこと、思ったこと。それら自分の歩んできた人生の中で「私」の中に「私自身」の唯一の経験として残っているものを GNLF という場で新たに還元することが「私」にしかできないことなのである。GNLF の本会議は、単なる交流の場でもなければ、新しい知識を得るためだけの場でもない。自分というたった 1 人の存在でしか経験し得なかった自分の中のそれまでの経験を、新しい形で還元し提供する場なのである。知識の吸収に留まらず、自分の持っている経験から新たな自己の断片を創出する場なのである。

私は印度派遣に参加した後、本会議運営に携わった。しかし、それまでのような中途半端な思い入れも、自分のポジションが分からず悩むこともなかった。私は自分が新たにインドで得た経験を最大限に新しい形に変えてみせるという目標を持って帰国し、すでに始まっている本会議に参加した。自分にしかできないことを今は持っている。GNLF での自分の居場所を見つけてはいたが、それでも迷惑をかけたメンバーの中へ戻る時、それまでの距離を超えて受け入れてもらえるかが不安だった。しかし、遠く離れかけていたメンバーにやっと追いついた時、彼らの温もりを感じた。GNLF という大きな乗り物にただ乗っかることしかできていなかったそれまでと違い、自分もその乗り物の中によろやく乗り込むことができたのである。そこは大きく暖かく全員が原動力として存在する空間であった。

本会議の期間はあっという間に過ぎて行った。運営として講演に全て参加できた訳でもない。参加者全員と仲良くなれた訳でもない。けれども自分の可能性を信じて取り組めたことは確かなこととして私の中に残っている。最後のクロージングセレモニーでの壇上で流した涙は、それまでの運営準備期間の重みを感じて流した涙でも勿論あったが、私という 1 人の人間が存在できる場所を、GNLF という団体の中で見つけることができたこと、そして何よりもそれを受け入れてくる仲間に出会えたことに対する嬉しさと感謝の気持ちがこみ上げてきた故に流れた涙であった。ただの好奇心で 1 号館の階段を上ったあの日から、私は GNLF という団体と向き合い、そして自分自身と向き合った。GNLF という空間で自分に何ができるかを必死に模索したこの夏を私は生涯忘れることはないだろう。そして新たに創り出した自己の断片を両手に抱え、次の経験へとまた繋いでいきたいと切に思う。

安井真

GNLF 本会議から早くも 1 か月以上たつ秋の夜、改めて、この入学からの半年間を振り返ってみる。福島でのボランティアから帰るバスの中で、ようやく、ゆっくりと、じっくり

と、落ち着いて。

4月にGNLFに入ってから半年間、僕は常にペースを上げながら駆け抜けてきた気がする。初めにGNLFに入ろうと思ったのは本当に簡単な理由だった。「せっかく時間のある大学生活を無為に過ごすのはもったいない。どうせなら、何か大学生活の中で、強く記憶に刻まれるようなプロジェクトに携わりたいな。」当時から国際関係には興味があったので、その思いを実現できるような国際系のサークルや学生団体を探していたが、国際系の団体は概して規模が大きいため、1年生から活動の中心に加わることは難しい。そんな折、偶然見つけたのがGNLFだった。新しくできた団体で人もそこまで多くなく、その上、先輩方もみんな感じのいい方たちばかりだったので、僕はGNLFに入ることを迷うことはなかった。

ただ、別に特段目立つようなスキルは持っていなかったもので、GNLFに参加してから本会議が終わるまではずっと、先輩や同級生に助けられながら、そして学びながら、日々振られるタスクをこなしてきた。初めのうちは、色々な部局の仕事を少しずつ任せてもらう、という形で、部局の仕事を体験させてもらった。関連団体に後援をお願いしに行ったり、企業に協賛をお願いしに行ったり、はたまた1つのテーマに関して調べてみたり。そのたびにその部局の先輩から、タスクをこなす流れやコツ、あるいは注意点などを色々とアドバイスしてもらうなど、随所で助けてもらった。最終的には6月の終わり頃にプログラム部局に落ち着くことになったが、この時に様々な部局のタスクを体験させてもらったことで、後々に別の部局のタスクのこなし方をプログラム（以下PG）部局に応用することができて非常に助かった。

PG部局に僕が入ってからのメインの事前準備活動は、パネルディスカッションの講師の選定・交渉・決定だった。しかし7月中に期末試験の対策に時間を取られてしまったせいで、8月初めのミーティングでの講師決定状況は0%という、危機的状況に陥っていた。そもそもPG部局には僕と先輩の2人しかいなかったため、同級生1人にPGにも所属してもらい、先輩と別のもう1人の同級生にも協力してもらうことで、この難局を乗り切ることにした。それからは怒涛の勢いで各方面にメールを送り、心優しくも会っても構わないという返事をくださった方々の所へ、8月の後半から9月の前半にかけてはそれこそ毎日のように訪問した。そして、本会議が始まる1,2週間前によくすべての講師が決まったのだが、他にも講師との直前の打ち合わせや調整などで本会議前日までタスクとの格闘は続いた。本会議が始まってからは、GNLFスタッフとしての仕事、GNLFのPG部局の委員としての仕事を同時並行で進めなければならなかったもので、その忙しい状況を楽しみつつ20時間ぐらいフルで活動するという、1年前の高校時代には想像もできないような過密ス

スケジュールを何とかこなしきった。

とまあ、この半年を随分と濃密に走り抜けてきたわけだけでも、このスケジュールを何とかこなすことができたのは、間違いなく、「『皆』の助け」と「笑顔」、この2つにすべて集約できると思う。

「皆」というのは、必ずしもGNLFと一緒に運営をやりきった先輩方や同級生だけを指すのではなくて、もっと、もっと幅の広い「皆」のことだ。ほかのスタッフはもちろんのこと、GNLFに参加してくれた皆さん、GNLFに協力してくださった社会人の皆さん、大学のクラスの皆、両親、他のサークルの友達…挙げればきりがないけれど、色々な方面で色々な人たちに助けってもらったおかげで、半年間を何とか乗り切ることができたと思う。GNLFの先輩方には、本当にいくら感謝してもしきれない。1年生で何も分からない僕に、何度もアドバイスをくださったり、困ったときには快く助けをくださったり、本当に核の部分のタスクを忙しい中こなしていただいたり…また同級生の2人も、特に精神的な面では支えになってくれていたし、タスクがいっぱいで忙しいときには自分も忙しいのに協力してくれたり…GNLFスタッフメンバーには、本当にあらゆるところで助けをもらっていた。本当に、本当にありがとうございます。そして、これからどうぞよろしく。GNLFに参加してくれた日本人学生も、運営スタッフが13人と少ない中で、外国人参加者のまとめ役などを何度もしてもらったし、何より、皆と語る時間はとても濃密で楽しかった。本当にありがとう。外国人参加者とも、スタッフと参加者として関わる場面が多かったけど、個人として話すときや皆で遊ぶとき、日本人の間だけでは絶対に得られないような、新鮮な経験をしたり、話を聞いたり、また同じ学生としてはしゃいだりできたことは、学生生活の中で非常に強烈な刺激だった。わざわざ日本に来てくれて、そして楽しい時間をありがとう。協力してくださった企業の方々、講師の方々、関連団体の方々の協力なしでは、当然今回の本会議を運営することはできなかった。心の底から感謝の気持ちを示したい。ほかにも感謝しなければならぬ人はたくさんいると思う。心から、本当に心の底から、「ありがとう」という気持ちを全員に伝えたい。

もう1つの「笑顔」。これはある意味で、今回のハードスケジュールをやりきる中で一番の要素だと思う。冒頭で、今がボランティアからの帰途、だということは書いたと思うけれど、今回ボランティアに行って、GNLFのスタッフとしての活動に一生懸命になり続けることができた理由を改めて確信した。なぜ、GNLFでの活動に対するモチベーションを維持できたか。それはもちろん、責任感でもあり、成長しているという充実感でもあると思う。だが一番僕が求めていたことは、何かをすることで見ることができる相手の「笑顔」であり、自分がすることのできる「笑顔」なのではないかな。最近、強くそう思う。喜び

の「笑顔」、感謝の「笑顔」、楽しいときの「笑顔」。それらを見た時に初めて、頑張っ
てよかったな、そう思える。たくさんの方の「笑顔」、それも心からの「笑顔」を見たい、とい
う思いが心の奥に常にある気がする。それはスタッフとの笑顔でもあり、参加者の皆の笑
顔でもあり、子供の笑顔でもあり、周りの人全員の笑顔でもあり。

今回のGNLFで学んだことは何か、と聞かれると、まだ明確な答えを出すことはできな
い。とてもたくさんの方のこの短い期間で学んだから。けれど、間違いなく得たものは、「感
謝」の気持ちを忘れない、っていう信念と、「笑顔」を作って見ていきたい、っていう自分
の気持ち。今回のGNLFではこの2つの新たな人生の軸を獲得することができた。最初の
「大学生活で強く記憶に残るプロジェクトに携わる」という目標以上のものを、今回得る
ことができた気がする。本当に、GNLF2011に参加して良かった。最後に、皆さん、本当
にありがとうございます。笑顔でこれからもがんばりましょう。

南部旭彦

グローバルネクストリーダーズフォーラム、第一回目の国際大会を終えて一か月が経っ
た。大会の思い出は奇妙なほど鮮明に残り、しばしば世界中に散らばる仲間たちが懐かし
く思いだされる。

思えば4月、大学入学のころ、半年後の自分がまさかこれほどにも充実した日々を送っ
ていようとは想像もしていなかった。と言いたいところであるが、実際想像はしていたか
もしれない。しかし、自信はなかった。大学は自らが求めねば何も得られない。これはよ
く言われることである。そしてそれはまさに真であろう。

私は高校まで、比較的控えめな人間であったと思う。部活こそ引退まで続けたものだが、
それ以外の課外活動にはさして興味はなかったし、どのコミュニティにおいても周りをリ
ードするような人間ではなかった。それでいて一人になるわけでもなく、周りにうまく合
わせて常に集団の中にいるタイプであった。

しかし私には浪人という時代があった。今まで同じような生活を送ってきた人間が、四
り大きな自由と責任を抱いて社会に踏み出していく中で、私は予備校という閉鎖的なコミ
ュニティに留まることになった。当時感じた悔しさが、いまでも私の原動力の一部になっ
ているのではないかと思う。先に大学に進学した者たちに負けてなるものかという思いが
あったのだ。

私は貪欲に行こうと決めていた。何事にも貪欲な大学生活を送って、絶対に後悔はすま
いと心に決めていたのだ。人間関係に始まり、学業、サークル、学生団体、バイト、家事……。
あらゆるものに挑戦したいと思っていた。大学では求めねば、得られないのだ。

私は数百枚ある新歓のビラを、一枚一枚確認した。もともと国際系の団体には興味があったため、関係しそうなものをピックアップしていった。いまでも覚えている。GNLFのビラは、白地に黒文字、写真もなく文字ばかりのお世辞にも見栄えがするとは言えないものであった。しかし、その文句には魅かれるものがあった。何に魅かれたのか今でははっきり覚えていない。10か国から招聘するというその規模だったのかもしれない。何か漠然とすごいなと、そして他のビラと見比べて、違うな、と感じた。2国間や3国間程度のものが多いなかで10か国というのは他にはいっさいなかった。

勝負はサークルオリの日だった。国際系の団体は片っ端からすべて説明を受けて回った。しかしなにか物足らなさを感じるものが多かった。いまでも覚えているが、ここでもGNLFはぱっとしなかった。どこにあるのか少し探し歩いたほどだ。GNLFのブースは他団体よりもこじんまりとしていて、人も少なく、というより私が赴いた時には谷口さん一人しかいなかった。もちろん谷口さんから説明を受けた。しかしそのほんの数分後には、もはや入部を決心している自分がいたような気がする。

谷口さんは簡潔に説明してくれた。団体の活動内容よりも、むしろその性格を示してくれた。

「GNLFは創設したてで、ノウハウは全くない。人員も少ない。だから他の団体と違って、一年生のうちからすぐに仕事を任されるだろうし、それを自分で考えて、責任をもってやらないといけない。当然、一年生もどんどん意見をだしてくれたい。」

そんなようなことを言われ、絶対ここに入ろう、とその場で思った。

せっかく課外活動をするのなら、自分が大いに成長できるところに入りたいと思っていた。東大には、団体構造も活動内容も確立し成熟した団体が多数あるが、そういった団体では、どこか先輩のひいたレールの上を走っていればうまくことが運び、責任感もとぼしく、充実感もあまりないのではないかという思いがあった。

GNLFなら全力で打ち込める、そう思った。そしてこれは確実にチャンスだとおもった。このチャンスをつかまなければ、自分の大学人生はなにか物足らないものになるのではないか、そんな気がしたのだ。GNLFの知名度は圧倒的に低かった。はっきりいって誰も知らなかった。それでも入部に際して全く迷いはなかった。むしろ入学当初に不安を抱いていた自分は、数週間後にはすでにかすかな自信を手に入れていた気がする。

まだ正式に所属もしていない段階で、松本さんがチュニジア大使館の訪問に誘ってくれた。ほんの少し前までは想像もしていなかったような世界だ。間違いなくいい経験になると思った。右も左もわからない状態で、とにかくなんにでも挑戦してやろうという気だった。震災の影響で入学式がなかった私にとって、スーツを着るのはなんとその日が初めて

だった。かなり緊張していたし、英語でのやりとりには正直圧倒された。

その日を皮切りに私のGNLFとしての活動が本格的に始動した。私は、外務担当になり、松本さんの直属の部下になった。GNLFでは初めてのことばかりだった。メールの書き方、社会人の方との食事、パーティなどの交流会、企業訪問などなど、日々が新鮮で、刺激に満ちたものだった。

GNLFは本当に忙しかった。運営メンバーの数に比して、目指すものは大きく、一人のタスクの量ははんぱなかった。特に、フォーラムが近づくにつれて、夢が実現してゆく実感とともに、忙しさも日ごとに増し、文字通り寝る暇もなくなるほどであった。それでも、みなそれぞれに責任感をもって自分のタスクをこなした。そしてそれをみなが分かっているからこそ、みなそれぞれを信頼しあうことができたし、だからこそまた頑張れる。本当に素晴らしい団体だと思った。惜しみなく努力できる環境がそこにはあった。

フォーラムは失敗も多かったし、批判も多かった。しかし、まだ第一回を終えたばかりだ。私にはまだ2年ある。GNLFはこれからもずっと続く。今、三年生が引退し、1, 2年生は早くも団体を引っ張っていく存在となった。どうしていいかわからないことはたくさんある。しかし、先輩方は何も無い状態から作り上げたのだ。今、そのすごさを改めて実感している。よいところを残し、悪いところを改善する。そして新しいことにもどんどん挑戦していきたい。GNLFの良いところは、みなが責任感を持っていることだ。みながあらゆることに挑戦し、たゆまぬ努力を続けられる、そんな団体にしていきたいと思っている。

佐々木菜

私はこのGNLFという団体で様々な経験をさせてもらった。それは、この団体に入る前に思い描いていた以上のことだった。

まず、この団体に入った目的は、渉外を経験して社会人としての基本的マナーを身につけることであつたのだが、私が学んだのは本を見て学べるようなスキルだけではなく、文字にできないこともたくさんあつた。数ある学生団体の中でこの団体を選んだのは、メンバーの一員としてかかわるならばその活動内容そのものにも自分が共感、賛成できる団体がいいと思ったからである。私は行動する前に迷いに迷うのだが、この団体に入ることを決断した一番の理由は、初めてのプロジェクトに向けて必死に活動している人たちと一緒に活動したいと思ったからかもしれない。

メンバーの一員になってからは、協賛のお願いに企業に行ったり、講師をお願いしに研究者の方に会いに行ったりと、普段の学生生活ではなかなか経験できないことをたくさん経験させてもらった。会いに行く際のアポ取りを一つ考えたって、電話にしろメールにし

る、慣れない言葉遣いに苦労し、想定外のことに困惑しながら、でも、ひとつひとつ進めていった。進めていくにあたり、メンバーに数多く指示を仰いだのだが、細かいことまで聞くのではなくある程度自分で判断できればよかったのだろう、と今だから思う。忙しい中、私の質問に丁寧に答えてくれ、私の気持ちを気遣い優しい言葉をかけてくれたメンバーには感謝してもしきれない。これからは、目的までの辿り着き方を自分で考えて行動できるようにしたい。

特に夏休みに入ってからフォーラムが近づき、準備が忙しくなったのだが、試験や他の活動もあり大変な中でメンバーが睡眠時間を削ってまで作業を進める姿にこのフォーラムへの熱意を感じ、メンバーと会えず個人で作業を進めるときに非常に勇気づけられた。また、私が試験前であまり活動できないときには、忙しいメンバーが自分の負担を増やしてまで私の分をカバーしてくれた。中でも、渉外に同行したり、試験前には渉外を代わりに引き受けてくれた同級生に心から感謝したい。

フォーラム直前期には、前からの自分の担当分に加え、誰の担当か曖昧な部分も各自が自分から引き受けたり、タスクとして挙がっていないことを自らやってくれたメンバーもいた。みんながタスク超過の中、お互いを気遣い合い、各自がタスクをこなすことが団体として前に進むだけでなく励ましにもなった気がする。タスクの合間の雑談であったりタスクの話であったり、ちょっとしたことが息抜きになり、作業を続けることができた。

そしてフォーラム前日。自分のやるべきことはやりきったのか、もっとできることがあるのではないかと心配に思うこともあったが、今までのどのイベントよりも楽しみでワクワクしていたあの時の気持ちを私は決して忘れることはないだろう。

フォーラム当日。準備をしている中で仲良くなった運営メンバーや参加者に会えるのが楽しみでならなかった。海外からの参加者が到着したときには、それまでは書類上で動いているような気がしていた話が現実のものなのだという実感が持て、感動するとともに自分たちの団体がやっていることへの責任感を再確認した。レセプションでも、各国大使館や各国関連団体の方がいらっしゃっているのを見て、このフォーラムの規模の大きさを改めて感じた。レセプションでごあいさつをいただいた方からのお言葉を聞くたびに、なんとしても次の日以降のプログラムを予定通りに進め、参加者に期待以上のものを持ち帰ってもらえるようにしたいという気持ちが強くなった。

運営メンバーが自分の全てをかけて準備したフォーラム中の一週間は、あっという間に過ぎていったが、毎日が楽しくて楽しくて、眠ってしまうのがもったいないくらいだった。想定外のことが起こったりして走り回っていることも何度となくあったのだが、そんな時にも、自分しかやっていない仕事をやっているのだと思うと自分は運営メンバーの一員と

して動くことができているのだと実感することができた。

フォーラム最終日には、各国の参加者を成田空港まで見送りに行ったが、涙を流している参加者もあり、私が思っている以上に参加者同士が交流でき、仲良くなったのだということが伝わってきた。だが同時に、英語が苦手なせいでなかなか参加者とコミュニケーションをとれず、運営委員としてやるべきことを理由にして交流をおろそかにしていた自分が残念で、ふがいなかった。今回の後悔を二度としなくて済むよう、普段から英語力をつけ、外国人と英語でスムーズにコミュニケーションできるようにしておきたい、と強く強く思う。

私がこの活動を通して一番変わったのは、尊敬できる運営メンバーに出会い、この人たちと一緒に活動していきたいと思うようになったことではないかと思う。一人で作業を進めているときにはなかなかモチベーションが続かなかったが、それでもフォーラム終了まで活動を続けてこられたのは、仲良くなったメンバーの支えがあったからだ。私はこなせるタスクが少なく、迷惑をかけてばかりだったのだが、余裕がないときでもそんな私を怒ることなく受け入れてくれた GNLF メンバーに感謝したい。メンバーがいい人ばかりでなかったら、私はこの団体で活動を続けてこられなかっただろう。

私はこの団体に入るときにここまでメンバーと仲良くなれるとは予想していなかった。私が入った時に既に入っていたメンバー同士は仲がいいなあとは入ったときから思っていたのだが、私もその中に入り、先輩にかわいがってもらえ、同級生に仲良くしてもらえることが非常にうれしい。フォーラム期間中は、どんなに疲れていても、メンバーと一緒にいられるのなら起きていたいと思ったほどである。「みんなと準備している時間が一番楽しい」。フォーラム前にそう言っていた先輩の言葉に当時は深く共感したが、当日も同じくらい楽しかった。

ともに苦労や緊張を分かち合い、苦しくも楽しい日々を共に過ごしたこのメンバーとの絆は他ではなかなか得られないだろう。この絆が自分の今の原動力になっている気がする。そしてこれからはそんなメンバーの作り上げてきたこの団体を何が何でも守り、発展させていきたいという気持ちが私を動かすのだろう。

10. 決算報告書

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2011東京 国際大会 会計報告書		
2010年11月1日から2011年10月31日まで		
グローバル・ネクストリーダーズフォーラム日本委員会		
(単位:円)		
科 目	金額	備 考
I 収入の部		
1 賛助会費	120,000	個人会員協賛 一口10,000円
2 助成金収入	1,670,000	財団等の詳細は報告書に記載
3 企業協賛収入	2,000,000	企業等の詳細は報告書に記載
4 学生参加費	1,340,165	国内学生学生30,000円 海外学生400ドル
6 雑収入	0	
当期収入合計 (A)	5,130,165	
前期繰越収支差額	0	
収入合計 (B)	5,130,165	
II 支出の部		
1 旅費交通費	2,669,543	渡航費・会場移動費
2 食費	863,683	各日程朝食・昼食・夕食費
3 施設利用費	775,200	オリンピックセンター利用費・ホテル宿泊費
4 研修費	38,370	江戸東京博物館入館費・鎌倉観光費
5 通信・配送配達費	27,338	国際電話費・各種書類郵送費
6 広告宣伝費	64,500	パンフレット作成費
7 接待交際費	104,070	講師謝礼品・通訳謝礼金
8 管理諸費	42,210	銀行手数料・ドメイン管理費
9 備品・消耗品費	196,298	事務用費・会場備品費・各種消耗品費
10 雑費	233,080	各種雑費
当期支出合計 (C)	5,014,292	
当期支出差額 (A) - (C)	115,873	
次期繰越収支差額 (B) - (C)	115,873	

11. ご連絡先

今後、来年2月までに最終報告書を発行いたします。最終報告書には講義録のほか、会期中の写真などを掲載いたします。なお、組織体制は2011年12月3日をもちまして、役員の改選等を行い2012年の組織体制に移行いたしました。

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム日本

事務局：〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-6 アトラスビル6階 IBIC本郷内

メールアドレス：info@nextleaders.net

[報告書、2011本会議に関するお問い合わせ]

2011 事務局長 谷口大祐 taniguchi@nextleaders.net

[新体制、2012本会議に関するお問い合わせ]

2012 会頭 田淵寛次郎 tabuchi@nextleaders.net

以上

最終改訂日 2011年12月15日